月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.16



リーシャの○○な休日!?

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

ナイアル＆ドロシーが逆境に立ち向かう！

英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

"アイツら"の登場でランディがピンチ！

みんな集まれ！ ファルコム学園

啄木鳥しんき

イラストメッセージ

ファルコム jdk バンド
ドラマー・オカジの

人生半キャラずらし

Falcom FanArt Collection

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

『ブランディッシュ』のドーラが再び登場！

『ワイルド＆セクシー』

▶AIKYOU◀



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説　零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

第4話『リーシャと銀のハイキング』

　おだやかな日差しが、アルカンシェル劇場の二大スターの看板を照らしていた。

　一枚はトップスターのイリア・プラティエ。豪奢な金髪の美女である。

　もう一枚は、大型新人アーティストのリーシャ・マオ。神秘的な美貌の少女だ。

　彼女たちを中心とした舞台で、アルカンシェル劇場の名は周辺諸国にも知れ渡っていた。

　その控え室でのこと――

　午前の練習が終わると、リーシャはすぐに練習用の衣装から私服へと着替えた。

「思ったより長引いちゃった……急がないと……」

　そこへ、ぬうっと背後から手が伸びてくる。

「ハッ!?」

　むんずっ！　とリーシャの胸が、その両手に掴まれた。

「ひゃっ!?」

「リ～シャ～?」

　胸をつかんできたのは、金髪の女性だ。

「あ……イ、イリアさん……!?」

「そんなにあわてて、どこへ行くのかしら?」

　まだ彼女は《太陽の姫》の衣装を着たままで、まるで本物のお姫様みたい。

（まぁ、本物のお姫様なら、女の子の胸をつかんだりしないだろうけど……）

　とリーシャは内心で苦笑した。

「あの～、イリアさん……ちょっと、今日は、人と会う約束がありまして……」



「なんですって!? まさか、彼氏が!?」
「そ、そんなわけないじゃありませんか！ だいたい、稽古ばかりで、作る暇なんか！」
「うん、知ってた……まぁ～、この胸に誘われて言い寄ってくる男は星の数でしょうけれど」
もにゅん、もにゅん、と白くて細い指に、リーシャの胸がもみしだかれる。
「はぅ!? あ……そんな……イリアさん、だめです。そんなにしたら……」
「リーシャって、それほど背は高くないし、体だって細いのに、胸ばかり、こんなにも！ ハアハア、なんか興奮してきちゃったかも」
「や、困ります……ああ……おかあさ～ん」
控え室の入り口あたりから、深々としたため息が聞こえた。
「はぁ～～～～。イリアさん、リーシャ姉になにやってんだよ?」
呆れ声をあげたのは、シュリだった。
いろいろあってイリアが弟子として迎え、アルカンシェル劇団の新人アーティストとして練習を積ませている十三歳の少女だ。
テヘッ、とイリアが舌を出した。
「あまりに、もみ心地がいいものだから、つい♪」
ようやく不埒な両手から解放され、リーシャはへたりこんでしまう。
シュリが肩をすくめた。
「リーシャ姉、なんか急いでるんだろ? 早く行ったほうがいいんじゃないか?」
「う、うん……ありがとう、シュリちゃん」
「シュリ、本当にすごいのよ!? あんたも、もんでみる?」
「いや、遠慮しとく……」
「ううぅ……イリアさん、午後の練習には戻りますから……失礼します！」
リーシャは、他のスタッフにも挨拶しつつ、逃げるように通用口から劇場の外へ出た。
物陰に隠れる。
「はぁ、イリアさんたら……本気で急がないと……」
次の瞬間、黒い影が現れた。建物の壁を蹴って、屋根へと飛ぶ。
顔を仮面で隠し、黒衣をまとった者が、人知れず東へと向かうのだった。



その部屋には、ふたりの男がおり、地下水のように冷たく洞窟のように暗い禍々しい気配と緊張感が満ちていた。
一方の男――
部屋の主は、鋭利な刃物のような雰囲気の青年であり、名をツァオ・リーといった。
表向きは黒月貿易公司の若き支社長だが、正体は犯罪組織《黒月(ヘイユエ)》の幹部である。
「フフ……さすがは銀(イン)殿だ。まさか、これほどの成果をあげてくださるとは……《黒の競売会(シュバルツオークション)》の失敗により、ルバーチェ商会は大幅に勢力を減じました。この街(クロスベル)の裏社会、予定より早く牛耳ることができそうですよ」
銀(イン)と呼ばれた、もう一方の男は――
顔を仮面で隠し、黒いローブをまとっている。
実は、理由(わけ)あって声まで変え、男装をしている、リーシャであった。
アルカンシェル劇団の新人リーシャ・マオと、犯罪組織の幹部が厚く遇する黒衣の男《銀(イン)》――その両方の立場が彼女だった。
感情を隠した平坦な口調で返す。変装のために歪んだ声だった。
「私が受けたのは、オークションの出品物を確認する依頼だけだ……」
「フフ、そうですね……騒動を起こしたのは警察の特務支援課ということになっているとか。それこそ素晴らしい。自分たちが手を汚すことなく、競争相手を蹴落とすことができたのですから」
「…………」
リーシャは、当時のことを思い出す。
あの夜――
《銀(イン)》として依頼を受け、出品物を調べるために会場へと乗りこんでいた。
ところが、保管部屋に押し入った直後、ロイドたち特務支援課が現れたのだ。
「なっ……!? あんたは……!!」
「……妙な気配がするかと思えば、お前たちも入りこんでいたか」
まっすぐな目をした青年と対峙して、リーシャは戦うことなどできなかった。
ロイドたちは、先日、イリアと劇団のために尽力してくれた。リーシャにとっての恩人であり、友人だから。
しかし、別のことも考える。
(でも、ここで簡単に協力するのは不自然よね? 正体がバレたら困るし……)

熟考の末、こんな言葉を放った。
「フフ、お前たちを始末するのは簡単だが……この場を任せても面白いことになりそうだ」
「なに……⁉」
「奥の部屋に競売会後半の出品物がある……《黒月(ヘイユエ)》に流れた情報によると、面白い〝爆弾〟があるらしいぞ？　その目で確かめてみるといい」
　そう告げて、屋敷を後にした。

　リーシャは物思いから意識を戻す。
「フン……」
　今にして思えば、なぜロイドたちに任せようと思ったのか？　なぜ出品物を確かめずに屋敷を離れたのか？
　自分のことながら腑に落ちない。
（まるで、それらが運命であったかのよう……運命？　私らしくもない……）
　リーシャは思考を振り払った。
　ともあれ、結果だけ見れば、黒月(ヘイユエ)にとっては願ってもない展開になっている。
　いつも本心を隠している雇い主(ツァオ)が、それとわかるほど上機嫌になるほど。
「フフ、すでにルバーチェ商会のルートを幾つか押さえることができました。今、あちらは目立った行動が取れませんからね。一方的すぎて少々物足りないほどですよ……さすがは、伝説の凶手、銀(イン)殿です」
「私は依頼があったから動いた……そして、利用できるものはすべて利用する……それだけのこと」
　口ではそう言いながら、リーシャは内心で、申し訳なくて仕方ないのだが。
（はぁ～……ロイドさんたちを利用する気なんてなかったのにな。マフィアから報復がないといいけど……あのとき、私が出品物を任せなければ……）
　ツァオが黒い笑みを浮かべる。
「フフ、本当に恐ろしい方だ。今後とも我々の、よき協力者であってもらいたいものです」
「……時間があれば、依頼は引き受けよう。今日は、ここまでだ」
「また〝時間〟ですか？」
「フ……」
（もう、午後の練習が始まっちゃう）
　そういえば──とツァオが口を開いた。
「銀(イン)殿には興味のないことかもしれませんが、特務支援課とルバーチェ商会の間で、進展があったようです」
「………」

無関心を装って黙りこんだが、内心では気になって仕方なかった。
「ルバーチェ側から警察に、手打ちを提案したようですね。支援課に報復や訴訟をしない代わりに、《黒の競売会(シュバルツオークション)》で彼らが見つけたものは、自分たちと関係がないことにしてくれ、と」
「……警察側は受けたのか？」
「非公式ながら。法廷で捜査の合法性と、ルバーチェの違法行為の両方を立証するのは難しい、と判断したのでしょう」
「フ……この街の警察は腑抜けばかりだな」
（よかった～、ロイドさんたちは安全になったのね！）
　リーシャは内心で安堵した。
　ツァオが机のうえの報告書をなでる。
「おかげで、私の仕事は順調ですよ。これ以上ないほどに」
「……時間だ」
　銀(イン)は壁に向かって歩く。ぶつかる直前、自らの姿を歪ませて、その部屋から音もなく姿を消した。
　ツァオは薄笑いを浮かべていた。

午後の練習──



「リーシャ、もっと抑揚をつけて！」
「はい！」
　イリアの声が響いた。
　劇団のスタッフたちには、充分に完成しているように見えていても、彼女の目には、さらなる高みが映っている。
「もっと早く！　そう！」
　舞台の左右からジャンプしたリーシャとイリアが、中央で交差する。
　見守っているスタッフたちから、おお……と感嘆がもれた。
　練習用の衣装で、セットもない舞台だが、そこにイリアの描いている完成形を幻視したのかもしれない。
「いい調子よ、リーシャ！」
「は、はい！」
　踊るイリアの顔に笑みが浮かんでいた。
　リーシャも笑みをこぼす。
　充実している。
　生きていると実感する。
　イリアには、いくら感謝しても足りない、そうリーシャは感じていた。
　リーシャに才能があると見込んで、劇団アルカンシェルに誘ってくれたのは、他ならぬトップスターのイリアだった。
　決められた暗闇の道を歩くことしか知らなかった自分に、

光を教えてくれた女性。太陽のように。

　音楽が終わる。

　同時に全員が動きを止めた。

　ふぅ～、と誰ともなく息を吐く。

　一曲ぶんの練習が終わり、小休止となった。

　イリアがやってくる。

「リーシャ、最近、なにか気がかりがある様子だったけど、もう心配はなくなったようね？」

「えっ⁉　……気づいていたんですか……イリアさん」

「フッフッフッ、一緒に演じていれば、当然よ。創立記念祭の後からよね。最終日の打ち上げ(パーティー)から消えたことと関係あるのかしら？」

「す、すみません……」

「まぁ、それで気の抜けた演技をしてたら、厳しく言わせてもらったけど、完璧だったからね」

「え？　そうなんですか？　じゃあ、どうして気づいて？」

「私は完璧よりも上を目指してるから♪」

「あ……」

　舞台のことを口にするとき、イリアは真剣な顔をする。そして、舞台の将来を語るときは幸せそうに笑うのだ。

「完璧な演劇をすれば拍手はもらえるわ。でも、それだけじゃ足りない。お客さんが感動するのは、完璧を超えたときなのよ」

「はい……」

「今のリーシャなら、完璧の上を目指せると思う。もちろん、私も立ち止まってるつもりはないけどね」

　リーシャは心地よい緊張と高揚に包まれる。

　自然と笑みがこぼれていた。

「私、がんばります」

「よし！」

　ぱんぱん、とイリアが手を叩く。

「さあ、休憩は終わりよ！　次の曲をかけて！」

　イリアとリーシャのテンションは上がりっぱなしで、周りのベテランたちも集中していたが、端で話を聞いていたメンバーのなかには、必要以上にプレッシャーを感じてしまった者もいた。

　シュリが緊張しすぎて目を回してしまう。

「い、いくぞ……うわっ⁉　とっ、とととと……ととと……」

　セットも置いていない舞台でつまずき、ととと、と中央までたたらを踏んだところで、ずべりと倒れた。

　あわてて、リーシャは駆け寄る。

「シュリちゃん、大丈夫⁉」

「ご、ごめん……イリアさん、リーシャ姉……オレ……」

　泣きそうなシュリの頭を、イリアの手がくしゃくしゃとなでる。

「ごめん、ごめん！　ちょっと練習がハードだったわね。考えてみれば、最近、休みもなかったし。疲れからミスが出て当然だわ」

「イリアさん、オレ、まだ……‼」

「体調管理もプロの仕事！　と言いたいところだけど、あんたの歳なら、教えている私の仕事よね」

「大丈夫だよ！　まだ練習できる！」

「いいから言うこと聞きなさい。今日は、お休みにするわ。みんなも、急で悪いけど、一息入れましょう」

　団員たちから「そいつは助かるな～」とか「ようやく休みか～」と笑い声がこぼれた。

　半分はシュリを気遣ってのことだろうけれど。

　こういうとき、リーシャは、ここにいる団員たちが家族のように感じられる。

　不服そうなシュリの頭を、もう一度イリアがなでた。

「休日に英気を養うのもプロの仕事よ？　あんたに、それができるかしら？」

「む……休むことなんか、誰にだってできるだろ。オレは、ひとりでだって練習するからな！」

「ダメよ。私と一緒に来なさい。休日のなんたるかを教えてあげるわ！」

　客席で舞台を見ていたアバン劇団長が、ゴホン！　と咳払いをした。

「大見得を切ったところ悪いが……イリア君、練習のあと、取材(インタビュー)があると言っておいたはずだな？」

「どうも～‼　お久しぶりです！　クロスベル通信(タイムズ)のグレイス・リンです！」

　エメラルド色の瞳を輝かせて記者の女性が入ってきた。

　その横で、カメラマンの青年が、パシャパシャとシャッターを切る。

　グレイスがマイクを向けた。

「イリアさん、練習を終えての手応えを、ひと言！」

「ふふ、創立記念祭の公演を経て、私を含めた団員たち全員が成長しているのを感じるわ。次は前回より素晴らしい舞台を披露できそうよ」

「わ～お！　もしかして、もう具体的なアイディアが、おありなんですか⁉」

　ねぎらいや挨拶ではなく、演劇の話から始めるあたり、イリアの性格を知っている。さすが地元の記者だ。

「アイディアね……話すと長くなるかしら。ねえ、リーシャ」

「はい？」

「シュリと遊んできてくれる？　劇団長、すこし小遣いを渡しておいてよ。どうせ、ほとんど手持ちがないに決まってる

んだから」
「やれやれ、イリア君にはかなわないな」
　リーシャはあわてて両手を振る。
「そんな！　ミラなんて……」
「オレは、休みなんかいらないって、イリアさん！」
　シュリの反論に、イリアが顔をしかめた。
「あんたね、今さら照明や音響のスタッフに、やっぱり休みなしって言う気？　恨まれるわよ？」
「うっ……」
　すでに大半のスタッフは引き上げていた。
　呼び戻すことさえ難しいだろう。
「リズムもなしでは練習にならないでしょ？　明日、居残りで見てあげるから、今日は休みなさい」
「わ、わかったよ……そのかわり、明日！　絶対だからな！」
「あんたこそ、早々にへばるんじゃないわよ？」
　ヒラヒラと手を振ると、イリアは記者たちのほうへ向かっていった。
　グレイス記者が、もみ手しながら待っている。
「うふふん♪　イリアさんのアイディアって、もしかして、そこの若手の子と関係があります？」
「おっ、鋭いわね～。でも、それはナイショ」
　リーシャは、劇団長から「まぁ、イリア君から押しつけられたと思って受け取ってくれ」とお小遣いを渡された。
　シュリと一緒に着替えをして、劇場を出る。
　ひとまず、中央広場に来てみたものの、なにをしていいやらわからなかった。
　シュリが首をかしげる。
「リーシャ姉、どうする？」
「どうしようか？」
「いつも、休日はどうしてんの？」
「え……」
　《銀(イン)》として依頼を遂行するか、なまらないように訓練をしているか――などと言えるわけがなかった。
　黙ってしまう。
　シュリが肩をすくめた。
「なんだ、リーシャ姉もオレと同じか」
「ええっ!?」
（ま、まさか、シュリちゃんまで裏社会の……刺客!?）
「休みの日なんて、寝てるよな～」
　リーシャは胸をなでおろす。
「はぁ～、そ、そうよね。でも、お小遣いをもらっちゃったから、家で寝てるってわけには……」
「そんなこと言われてもな。オレ、服と食事(メシ)以外にミラの使い道なんか知らねえよ」

「たしかに、防具と回復薬くらいよね。セピスのほうがクオーツに合成できるぶん使え――」
「はあ？」
　シュリに怪訝な顔をされてしまった。
　あわてて、リーシャは口元を押さえる。
　気が緩んでいたらしい。
「あ、いえ……ちょ、ちょっとした冗談なの。面白かったでしょう？　笑ってもいいのよ？」
「リーシャ姉って、ルックスも演技もすごいけど、ジョークのセンスはイマイチだよな」
「ううぅ……すみません」
　クロスベルに来るまで、冗談どころか雑談もろくにしてなかったのだから無理を言わないで欲しい、と思う。
　そのとき、見知った顔が歩いているのを見つけた。
「あ、ロイドさん！」



　ロイドたち四人はウルスラ病院から戻ってきて、鉱山町マインツに向かう途中だった。
　中央広場で声をかけられる。
「あ、ロイドさん！」
　呼ばれたほうを見ると、黒に近い紫色の髪の少女と、まるで少年みたいな格好をした女の子が、こちらに歩いてきていた。
「やあ、リーシャに、シュリじゃないか」
　リーシャが丁寧にお辞儀して、シュリがぶっきらぼうに片手を挙げる。
「こんにちは、みなさん」
「ちわ」
　エリィとティオが挨拶を返した。
「こんにちは」
「……どうもです」
　ランディが驚愕に目を見開く。
「なんてこった！　今日はついてるぜ！　こんなところで、アルカンシェルのスター、リーシャちゃんと会えるなんて!!」
「そ、そんな、大げさですよ」
「リーシャ姉の場合、大げさでもないんじゃねえの？　最近、ファンレターもすごいしな」
　シュリにまで言われ、リーシャが赤面する。
　ロイドも彼女の演技に見惚れたひとりだから、ファンの気持ちはわかるが……これ以上、言ったら、本当に困らせてし

まいそうだ。

「今日は、リーシャたち、練習が休みなのか？」

「はい。お休みになったものだから、困ってるんです」

「休みになったから、困る？」

　ロイドは首をかしげた。

　エリィたちも不思議そうな顔をする。

「どういうことかしら？」

「実は、お休みに慣れてないもので、なにをしたらいいのかわからなくて」

「な、なるほど……」

　シュリが唇を尖らせる。

「あんたたち、支援課だろ？　オレたち市民なんだから助けてくれよ」

「う、うーん……休日の使い方か……」

「家で寝てるってのは、ナシだぞ。それ、オレが提案して、リーシャ姉にダメ出しされたからな」

「いくらなんでも、それは提案しないから安心してくれ」

　ティオが手を挙げた。

「ん」

「おっ、いい案があるのか、ティオ？」

「ふふ……完璧です。休日といえば、ゲームです。とくに、対戦型の導力ネットゲームは、いくら時間があっても足りないほどです。〝ポムッと！〟といって、まだ開発段階のものなんですが――」

「すみません……それは面白そうですが……私、導力端末を持ってませんから……」

「オレ、難しいのはパスな。眠くなるから」

「がーん」

　ティオが膝をついた。

　今度は、エリィが前に出る。

「まだまだ導力端末は広まってないものね。だけど、本ならなにもなくても読めるわ。ここからだと、市立図書館も近くにあるし」

「ん～……すみません。できれば、シュリちゃんと楽しめるものがいいと思うんです」

「だから、難しいもんはパスだって！　本なんか表紙を見ただけで眠くなるだろ!!」

「そ、そうよね……」

　しゅん、とエリィがうなだれる。

　不敵な笑い声をあげたのは、ランディだった。

「この休日マスターの出番が来たようだな！　休日なら任せろ！　俺こそが、キング・オブ・休日!!」

「ランディ、お酒とギャンブルと非道徳的な場所は勧めないでちょうだいね？」

　エリィに釘を刺されると、キング・オブ・休日が、グッと言葉に詰まった。

　ティオが眉をしかめる。

「……ランディさん、最低です」

「そ、そ、そんなんじゃねえ！　え～～～っと、そうだ！　今から俺たちマインツに向かうんだけど、一緒に行くなんてのはどうだ？」

　シュリが手厳しく返す。

「はぁ!?　なにしに行くんだよ？　マインツなんて、山しかないんだろ!?」

　しかし、リーシャは興味を示したようだ。

「もしかして、シュリちゃんは、マインツに行ったことないの？」

「ノーザンブリア自治州から流れてきて、やっとクロスベルに着いたんだぜ？　わざわざ街から出ないって」

「大変だったときは、そうでしょうけど……今は、少しくらい遠出する余裕があるんじゃない？」

「まぁ、昔とは違うけどさ……」

「マインツは鉱山町で、特別な観光地ではないけど、行ったことがないなら、見ておいたほうがいいと思うわ」

「うーん、他に案はないのかよ!?」

　シュリに訊かれて、ロイドは頭をかいた。

「いや、考えてみたら、実は俺も休日にはトレーニングとか、釣りくらいなんだよな」

「はぁ～、つまんねえヤツだな」

「うう……返す言葉もない」

「仕方ねえ、リーシャ姉がいいって言うなら、つきあうか」

「ふふ、ありがとう、シュリちゃん」

　リーシャが微笑んだ。

　ランディが小さく拳を握る。

「おし！　乾いた仕事に、潤いが！　可憐な花が！　道中が楽しくなりそうだぜ」

　エリィとティオがジト目になっていた。

「どういう意味かしら？」

「……聞き捨てなりませんね」

「え？　あ、いや……それはだな……」

　ランディがあれこれと言い訳する。

　ロイドはリーシャたちと顔を見合わせ、苦笑していた。



　マインツに向かうため、西通りを通って住宅街のほうへ向かう。

　途中、リーシャが尋ねてきた。

「誘っていただいたので一緒に来ちゃいましたけど、よかったんですか？　お仕事の最中だったんじゃ？」

「支援要請を受けてるけど、べつにマインツまで一緒に行くだけなら、大丈夫だよ」

「ふふ、よかった」

「リーシャこそ、本当にマインツでよかったのか？」

「はい……街だけにいると忘れそうになるものを、いろいろ思い出させてくれますから」

「なるほど。そういう感性がアーティストには大切なのかもしれない。さすがだな、リーシャは」

「そ、そんなことは……」

　また彼女が照れて困ったような笑みを浮かべる。

　シュリが割り込んできた。

「こらっ、リーシャ姉にベタベタすんなよ」

「いや、ベタベタしてるつもりはないんだけど……」

「シュリちゃんってば……実は、ロイドさんと仲良くしたかったの？」

「はあっ⁉　どうしてそうなるんだよ、リーシャ姉⁉」

「えっ、違うの？」

「オレが、こいつと仲良くしたいわけないだろ！」

　シュリが睨みつけてくる。

「ははは……まいったな……」

　最初に出会ったとき、いろいろあったせいで、ちょっと苦手に思われてしまっているようだ。

　ロイドとしては不可抗力だと思っているのだが。

「そもそも、あんたら、マインツなんかに、なんの用事なんだよ？」

　少し長くなるけど――と前置きして、ロイドは受けている支援要請について話すことにした。

「――鉱山町で働いてる人は大勢いるんだが、みんな忙しいせいか、健康診断を受けに来ないらしくてね」

「へー休みもなく働いてるのか……大変だな……」

「ああ……」

　人によっては、酒盛りや夜遊びに忙しいこともあるようだが。

「そのため、定期的にウルスラ病院から医師が健康診断に行ってるらしいんだ。大勢が病院に来るより効率的だからね」

「そういや、オレはまだ受けてないけど、劇団(アルカンシェル)でも健康診断があるんだよな」

「入団したときに説明があったわね」

　リーシャがうなずいた。

　そりゃ、当然だな――とランディが言う。

「イリア・プラティエやリーシャちゃんが健康診断に来たら、ファンが集まっちまって大変なことになるぜ」

　エリィが苦笑して、ティオが肩をすくめて嘆息した。

「そうね。想像できてしまうだけに、怖いものがあるわ」

「……健康診断どころではなくなるかと」

　人気者になるのも大変だが、人気者というのも大変らしい。

　シュリが興味なさそうにしつつも続きをうながす。

「んで、その健康診断がどうかしたのか？　あんたたちが、やるとか？」

「俺たちは警察官であって医者じゃないから無理だよ。実は、ウルスラ病院から出た医師と看護師が、まだマインツに到着してないらしくてね」

「どこかで寄り道でもしてんのか？」

「そうかもしれない。なにか理由があるんだと思う……意外と、すこし遅れただけで、もう到着しているかもしれないけどね。俺たちはウルスラ病院で頼まれたから、様子を見に行くことにしたんだ」

　ランディが、ロイドの肩に手を置く。

「なんせ、同行した看護師ってのが、ロイドの姉のセシルさんだしな！」

　ティオが補足する。

「……そして、担当医はヨアヒム先生です。あれこれ理由をこじつけて、釣りをしているのかもしれません」

　今回の健康診断を担当する医師はヨアヒム・ギュンターといい、腕は確かなのだが、仕事を抜け出して釣りに興じるという悪癖があった。

　リーシャが不安そうな表情を浮かべた。

「連絡がつかない看護師って、セシルさんなんですか……」

「うん……そういや、リーシャはセシル姉と会ったことがあるんだな」

「はい。イリアさんの幼馴染みとして、創立記念祭の初日に、紹介してもらいました」

　シュリが思案顔をする。

「そういや、オレも挨拶くらいはしたな……優しそうな人だよな」

　警戒心の強いシュリが、初対面の相手を褒めるなんて珍しい。それだけ、セシルの人柄が温かいということか。

「ん？　な、なんだよ？　オレ、変なことは言ってねえぞ？」

「うん。セシル姉は優しい女性(ひと)だよ」

　ロイドはうれしくて笑顔をこぼしていた。

　マインツ山道に出たところで、バス停が見えてくる。

　リーシャは誰にも聞こえないほど小さな声で「なんだか、嫌な予感がする……」とつぶやいた。

「どうしたのかしら？　いつもより待ってる人が多いみたいだけれど……」

エリィが首をかしげた。

列の先頭にならんでいる青年が、こちらに気づいて声をあげる。

「おお！　あんたら、支援課だろ!?　なんとかしてくれよ！」

ロイドたちは駆け寄った。

「どうかしましたか!?」

「時間を過ぎても、バスが来ないんだよ！　こっちは仕事があるってのに！」

他のならんでいる人たちも口々に文句を言いだした。

落ち着いてください、すぐ調べます――とロイドは請け負う。

あっ、とティオが指を差した。

「ヨアヒム先生です」

最初は気づかなかったが、列の最後尾にならんでいる白衣の男は――医師のヨアヒムだった。

「いや～、君たち、こんなところで会うなんて奇遇だね」

「こんにちは！　こちらにいらしたんですか、ヨアヒム先生」

「ん？　その様子だと、僕に用事があるのかな？」

「はい。ウルスラ病院から〝マインツへの到着が遅れているようだから様子を見てきて欲しい〟と依頼されまして」

ヨアヒムが苦笑する。

「いや～、まいったな……ちょっと、いいポイントを見つけちゃったものでね」

「やっぱり、釣りをしてたんですか……」

「こればかりは、やめられなくてね！　だけど、健康診断は研修医のリットン君に任せたから大丈夫のはずなんだけどね……行ってないのかい？」

「え？　先に向かったんですか？」

「いくら僕が釣り好きとはいえ、忙しい炭坑夫たちを待たせるわけにはいかないからね。リットン君に〝いいかね、今から君に研修課題を出すよ――マインツで健康診断をして、その結果をレポートとして提出したまえ〟と……」

ロイドたち全員が呆れていた。

やれやれ、とヨアヒムが首を左右に振る。

「研修医ともなれば、それくらいやれなくてはね。まったく困ったものだよ」

「……困ったものなのは、ヨアヒム先生のほうかと」

ぼそり、とティオがつぶやいた。

ロイドは少し考えて――

「徒歩で行ってみるしかないな」

と結論づけた。

エリィが観念したように、うなずく。

「導力バスが故障したのかもしれないものね。乗客は外に出なければ安全だと思うけど、動けなくなっているかもしれないわ」

「……そうですね。今のわたしたちであれば、問題なくクロスベルかマインツへ護衛できるかと。街道には、さほど強い魔獣はいませんから」

ティオの言うとおりだろう。

ランディもうなずく。

「ふぃ～、しゃあねえな！　マインツまでだと、けっこうな距離になっちまうが、体力つけるには、ちょうどいいハイキングになるだろ！」

「はは……そうだな。警察学校でのサバイバル訓練を思い出すよ」

「俺も警備隊を思い出すぜ」

意気投合するロイドとランディに対して、エリィとティオは歩きはじめる前から疲れたような顔をしていた。

リーシャは、ずっと嫌な予感を抱えていた。

徒歩で行くと決めたロイドが、こちらへと視線を向ける。

彼は丁寧に頭を下げた。

「すまない、リーシャ、シュリ……トラブルが起きたようだ。バスは来ないし、今日はここで――」

「私も行きます！」

「えっ!?」

リーシャは真剣な口調で告げた。ロイドたちだけでなく、シュリまで驚いて目を丸くする。

「なんでだよ、リーシャ姉!?　そんなにマインツに行きたいのか!?」

「いえ、そういうわけじゃなくて……あの、その……直感というか……」

（ああ、どう説明したら……!?）

リーシャは苦悩する。

ロイドがうなった。

「う～ん、街道なら徒歩でも危険は少ないと思う……でも、どうしてそんなに行きたいんだ？　マインツに用事があるわけじゃないんだろ？」

「それは……悪い予感というか……」

「え？」

リーシャは頭をかかえる。『銀（イン）としての直感が、危険を察知しているのでな』と言えたら楽なのだが、そんなことは、寝言でも口走れない。

しかし、放ってもおけない気持ちだった。

意を決して――

「ううぅ……あ、あの！　私、ダイエット中だから、ちょうどいいかなと思いまして！　ハイキングとか、体力もつきそうですし！」

「ダ、ダイエット？」

ぽかん、としてるロイドに対して――

ハッ、とシュリが顔色を変えた。

「体力⁉　そういうことか、リーシャ姉！　おい、オレも行くぜ」

「シュリまで⁉」

「イリアさんに、〝早々にへばるんじゃないわよ？〟って言われたんだ。それって、オレに体力がないって意味だろ⁉」

「まぁ……そう取れなくもないと思うけど……」

うん、とシュリがうなずく。

「なるほど、ハイキングか。これぞ、有意義な休日の使い方って感じだよな～。劇場の中じゃできないことだ」

「待ってくれ、シュリ……ここから、マインツまでは、かなりの距離がある。子どもの足では――」

「はぁ？　オレは毎日、アルカンシェルで特訓を受けてるんだぞ。そこのチビッコよりは歩ける自信があるぜ」

いきなり天秤に掛けられたティオが、口をへの字に曲げる。

「……もしかして、チビッコというのは、わたしのことでしょうか？　非常に不本意なのですが」

「とにかく、あんたたちと一緒なら安全なんだろ？　なら、いいじゃんか」

押し問答していると、バスを待っている人たちが、ざわつきはじめた。「イリアさん？」「アルカンシェル？」「あれって、リーシャ・マオじゃ？」「まさか。スターがマインツなんて行くわけないだろ」「でも……似てるよなぁ～……？」

エリィがロイドに耳打ちする。

「ちょっと、まずいわよ？　騒ぎになっちゃうわ」

ティオもささやいた。

「ロイドさん……置いて行きましょう」

「まぁ、行きたいって言うなら、いいんじゃねえの？　このふたりなら〝途中で休憩〟なんて言い出さないだろうし……道中の安全は、このランディ・オルランドにすべて任せなさいって！」

魔獣のマの字もないような場所だというのに、巨大なスタンハルバードをぶんぶんと振り回す。

シュリが肩をすくめた。

「まぁ、ダメだって言うなら、リーシャ姉とふたりで勝手に行くけどな」

街道を徒歩で行くことが禁止されているわけではない。

ロイドが降参した。

「はぁ～、仕方ない……ただし、安全第一だ。俺たちの言うことは聞いてもらうからな」

「いいけど、変なこと命令するなよ？」

「するわけないだろ⁉」

ぺこり、とリーシャは頭をさげる。

「すみません、ロイドさん。わがままを言ってしまって……シュリのことは、私が面倒を見ますから」

「うん。俺たちも気をつけるけど、よろしく頼むよ」

「はい……」

リーシャは、シュリと一緒でなければ、ひとまずロイドたちと分かれ、《銀（イン）》の姿になってから追いかけることもできたのだが。

（ううん……シュリちゃんのことは、イリアさんに頼まれたんだから）

ぐっと気を引き締める。

（なにが待ってるかはわからないけれど、私が、シュリちゃんもロイドさんたちも守らないと‼）

「おお、リーシャ姉が真剣だ……やっぱりハイキングって、効果的な練習なんだな」

いろいろとシュリに誤解されている気がした。



できるだけ急いだほうがいいのは間違いないが、到着したときにバテバテでは意味がない。

ロイドは、魔獣との接触を避けつつ、みんなの調子を気にしながら進んでいった。

最初はシュリのことを一番心配していたが、すぐに大丈夫だとわかった。

アルカンシェルのふたりは充分に健脚らしい。

むしろ、大きな魔導杖（オーバルスタッフ）を持っているティオのほうが、大変そうだった。

「すこし休憩しようか？」

「……問題、ありません……はぁ、ふぅ……このくらい、へっちゃらです」

「うーん、そうか。無理はしないでくれよ、ティオ」

「もちろんです、ロイドさん……はふっ……」

山の中を進んでいた一行だが、ぐるりと左へ曲がったところで、視界が開けた。

マインツの山々を眺めることができる場所だ。

「すごい……」

シュリが立ち止まり、その景色に目を奪われていた。

その横にリーシャもならんで、うなずく。
「街を少し出るだけで、こんなにも素敵な場所があるのね」
「ん？　リーシャ姉は知ってたんだろ？」
「ゆっくり立ち止まったことはないから……」
「あ、そうか……こんなところ、ふつうなら徒歩で来ないもんな」
「ロイドさんたちに感謝しないと……あ！　ごめんなさい、つい見入ってしまって」
「いや、そろそろ休憩しようと思ってたから、ちょうどいいよ。だいぶハイペースで来たからな」
　ティオは魔導杖を支えにして、なんとか、しゃがみこむのに耐えていた。
　エリィのほうも、汗をハンカチでぬぐっている。
　ランディは重たいスタンハルバードを担いで、まだ余裕がありそうだった。それとなく、周囲を警戒してくれている。
「バス、見かけなかったなあ？」
「トラブルから回復して、もうマインツに向かったのかもしれないな」
「ちょいと楽観的な気もするけど、意外とそんなとこかもな」
　ランディが肩をゆすって笑う。
　ティオが魔導杖を掲げた。
「見晴らしもいい場所ですし、付近をサーチしてみます」
「もう大丈夫なのか？」
「……わたしは、最初から問題ありません。子ども扱いされるのは心外です」
　シュリを意識しているのか、いつも以上にティオが意地を張っている。
　少し心配になるロイドだったが、ここは信頼することにした。
「じゃあ、頼むよ」
「はい……」
　ティオがうなずくと、シュリが物珍しそうに尋ねてくる。
「なんだ？　なんかやるのか？」
「だ、だめよ、シュリちゃん……お仕事の邪魔をしたら」
　リーシャがたしなめた。
　とはいえ、なにをするかくらい教えてあげてもかまわないだろう。
「ティオは特別なセンサーを持っていて、その感度を高めることで、かなり遠くのことも把握できるんだ」
「マジかよ⁉　すげえじゃん！　ただのチビッコじゃなかったんだな！」
　シュリが瞳を輝かせて賞賛した。
　魔導杖を構えたまま、ティオが赤面する。
「こ、これくらい……どってことありません……」

　ちょっぴり得意そうな様子に、ロイドたちは苦笑してしまった。
　おほん、とティオが、わざとらしく可愛い咳払いをする。
「……すこしだけ、静かにしていてください」
「おう、わかった！」
　うなずくと、シュリは両手で口元を押さえた。
　他のメンバーも固唾を呑んで見守る。
　風の音と、鳥の鳴く声がした。
「アクセス。……感度、最大……付近をサーチします……」
　ティオの髪飾りの三角部分が、赤く明滅しはじめる。
　魔法陣が浮かび上がった。
　穏やかな青白い輝きが、彼女を包んだ。
　そして――
「ッ⁉」
「ティオ、なにかわかったのか？」
「この先で、魔獣が戦っている音がしました！　それと、金属音も……」
「なんだって⁉」
「距離は、20セルジュほどかと」
「それなら一息に走れるな……行こう、みんな！」
「はい」
「わかったわ！」
「おっしゃ、急ごうぜ！」
　ロイドの呼びかけに、ティオ、エリィ、ランディが声をあげた。
　リーシャとシュリもついてくる。
「シュリちゃん、魔獣がいたら、絶対に私から離れないで」
「わかってるって！」
　ほどなく、ロイドたちの耳にも、戦いの音が聞こえてきた。



　停留所の手前、吊り橋をくぐった直後の場所に、バスの姿があった。
　あんなところで停まる予定はないはずだ。
　白煙をあげている。
　ガシャン！　ガシャン！　と金属音がしていた。
　ロイドは目を見張る。
「魔獣だ！」
「でかいぞ！　よりによって、バスを攻撃してやがる！」
　ランディがスタンハルバードを構えた。
　バスのなかで乗客が助けを求めているのが、窓越しに見えた。
　たちこめる白煙のせいで、その顔まではわからないが……

ティオが警告する。
「バスの導力機関が燃えているようです……車内に火が移る可能性もあり、あのまま乗っているのは危険かと！」
「バスを壊すなんて……街道の魔獣とは思えないわ……」
エリィが緊張した声をあげた。
ロイドは思考を巡らせる。
バスの乗客の安全が最優先だが、そのためには魔獣を遠ざけなくては。
「まず、魔獣を引き離す！　それから、バスの乗客を避難させるんだ！」
自分とランディが魔獣と戦い、ティオとエリィに乗客の誘導をしてもらおう——そう指示しようとしたとき、後ろからリーシャの声がした。
「ロイドさん！　私たちがバスに乗ってる人たちを避難させます！」
「えっ⁉」
「あの魔獣、手加減できる相手じゃありません！」
「わ、わかった……頼む、リーシャ！」
ロイドは仲間全員で、魔獣へと向かった。
リーシャが魔獣の強さを感じ取った理由はわからない。
しかし、バスを破壊してしまうほどの魔獣だ。かなり危険な相手なのは間違いなかった。

その魔獣は、紫色の頭を持ち、筋肉の塊のような身体を上半身だけ、地面の穴から出していた。
見えている上半身だけでも、ロイドより大きい。
全身を硬そうな体毛で覆っており、所々に棘のような長い毛が生えている。
なにより特徴的なのは、両手に備わった巨大な爪だった。
一本一本が剣のように鋭く太く長い。
その凶悪な爪で、バスの外装を破壊し、導力機関まで傷つけたようだ。
ロイドは注意を引きつけるべく、武器(トンファー)で殴りつける。
「さぁ、かかってこい！」
「歯応えありそうじゃねぇか!!」
同じように、ランディも打撃を加えた。
頑強だ。さほど効いた様子はない。
それでも、自分たちへ魔獣の意識を向けさせることはできた。
バスから遠ざける。
ティオが魔導杖を突き出し、《アナライザー》を使う。
センサーを集中させて敵の情報を収集する、彼女の得意技だった。
「なっ⁉　これは、グランドリューではありますが……危険度、大……手強いです」

以前、同じタイプの魔獣とは戦ったことがあるが、これほど強くはなかった。
人間にも強い弱いがあるように、個体差があるのだろう。
得られた情報をティオが数値化して教えてくれる。
ロイドたちに戦慄が走った。
「そんなに強いのか⁉」
「やばいぜ、ロイド……準備なしに戦える相手じゃない」
「くっ……」
「でも、まだ避難は終わってないわ！」
エリィの言うとおりだ。
リーシャとシュリが、バスの中に声をかけ、今、ようやくハッチが開けられたところだった。
白衣の青年と、看護師姿の少女が降りてくる。
「ロイド⁉　ロイドなの……⁉」
「セシル姉⁉」
バスに乗っていたのは、ロイドの姉のセシルと、研修医のリットンだった。
「ひ～!!　た、た、たすけて～!!」
「セシルさん！　今は、避難してください……!!」
「えっ⁉　リーシャさん⁉」
「理由(わけ)あって手伝っています！　さあ、急いで避難を！」
「そ、そうね！」

リーシャにうながされ、セシルがうなずく。
運転手も降りてきた。
「あ、ありがとうございます！　バスに乗ってたのは、これで全員です！」
「急いで逃げてください！」
「はい！　って……リーシャ・マオ⁉」
どうやら、誘導は彼女たちに任せておいても大丈夫そうだ。
ロイドは魔獣に意識を戻す。
グランドリューが、ぐんっと身体を反りかえらせる。
「グオオオオオオォォォォォォ～～～～～～～～!!」
恐ろしい雄叫びをあげる。
リットンが、腰を抜かしてしまった。
「ひっ……ひぃぃぃ～～⁉」
「しっかりしてください、リットンさん！」
セシルに叱咤され、シュリに引っ張られて、彼は倒(こ)けつ転(まろ)びつ逃げはじめる。
「さあ、運転手さんも早く！」
「は、はい！」
リーシャに言われて、バスの運転手も走りだした。
街道をクロスベル方向へ逃げていく。
あとは、この魔獣を退治できれば、大丈夫だ。
「みんな！　全力でいくぞ！」

「わかったわ！」
「おう、任せろ！」
「いきます……」
ティオが魔導杖の先端を、グランドリューに向けた。
「……ガンナーモード、起動します……オーバルドライバー、出力最大………エーテル、バスター!!」
青白い閃光がほとばしる。
まぶしくて、目を開けていられないほど。
轟音が鳴りひびいた。
ティオの切り札であり、ロイドたちが使えるなかで、最も威力のある攻撃だ。
ところが、ティオが息を呑む。
「……ッ!? 敵、反応あり！ しかも……そんな……」
ロイドは自分の目を疑ってしまう。
「なんだと!?」
巻きあがった土煙が晴れたとき、そこには、さらに三体のグランドリューが現れていた。
ランディが舌打ちする。
「チッ……そういうことか。さっきの雄叫びで、仲間を呼びやがったな!?」
「ど、どうするの、ロイド!?」
エリィが拳銃を構えつつ尋ねてきた。
――時間を稼いで、逃走するか？
いや、ロイドたちはともかく、一般人であるセシルたちが、何セルジュも魔獣から走って逃げるなんて、無理だ。
彼女たちが遠くに逃げるまで時間を稼ぐのは、退治するよりも難しいだろう。
「俺たちが逃げるわけにはいかない……ここで倒すしかないんだ……!!」
「そ、そうよね……」
「へへ！ とっとと終わらせようぜ！」
ランディが空元気で鼓舞する。
ティオがうなずいた。
「こんなところで……負けるわけには、いきません……」

リーシャは、バスに乗っていた人たちや、シュリを連れて街道を走っていた。
しかし、一般人の研修医や運転手は、早くもバテはじめている。
セシルだけは気丈に振る舞っているものの、彼女とて限界は近いだろう。
なにより、嫌な予感が消えていない。

（本当に危ないのは、こちらではなく……やっぱり、ロイドさんたち……）
「ちょっと休憩を入れましょう」
リーシャの声に、ぷはぁ～と男ふたりがへたりこんだ。
シュリが不満そうに嘆く。
「かぁ～！ だらしないな！」
研修医のリットンが、息も絶え絶えに返す。
「ぜえ、ぜえ……そ、そう言わないでくれよ……僕はデスクワークのほうが得意なんだ……はぁ、はぁ……」
「わ、私も……持病の腰痛が……うぅぅ……すみませんね、お客さん……」
運転手のほうも、これ以上は走れそうになかった。
戦闘の音が聞こえないくらいには離れたし、特務支援課が魔獣を退治できれば、充分に安全だとは思うが……
おそらく、それこそが難しい。
（あの魔獣は、今のロイドさんたちでは……気配もひとつじゃなかったし……）
助けに行かなければ！
「あの、みなさん、ここで待っていてください。動けるようなら、できるだけクロスベルのほうへ」
シュリが目を丸くする。
「え？ リーシャ姉、どうする気だよ？」
「私は、ロイドさんたちの様子を見てくるわ」
「なっ!? なに言ってんだよ!?」
「ごめんなさい、シュリちゃん……だけど、私、行かなくてはいけないから……」
「意味わかんないよ！」
唐突に、セシルが駆け寄ってきた。
リーシャは手を取られ、ぎゅっ、と両手で握られる。
「な、なんですか、セシルさん？」
「そう……そうなのね……リーシャさん……」
「えっ!?」
「今まで、気づかなかったけれど、あなたは……」
セシルが真剣な瞳で見つめてくる。
（ま、まさか……私が《銀（イン）》だとバレた!? ううん、いくらなんでも、そこまでは無理よね……でも戦える力を持ってることは気づかれたのかも？ そういえば、この人は、イリアさんの親友だったっけ……）
セシルを紹介したとき、イリアは笑って言ったものだ。
〝有能かと思えば天然で、生真面目かと思えば意外と話せる。そして、いざというときには鋭くて、よく助けてもらったものだわ〟と。
それは、日曜学校での話だったが、あのイリア・プラティエが〝鋭い〟と評したのだ。

ウルスラ病院でも、若くして看護師チーフを任されていると聞く。

「うぅぅ……」

（よりにもよって、ロイドさんのお姉さんで、イリアさんの親友である、この人に見抜かれてしまうなんて……）

しかし、まだ確信はないはず。

誤魔化せるかもしれない。

「あ、あの、なにを感じられたか、わかりませんけど……私は、べつに……」

「いいのよ、隠さなくても。さっきの表情を見て、確信したわ」

「そんな⁉」

リーシャは声から体格まで変えて、変装することができる。

演劇をはじめてからは、さらに磨きがかかったと自負していた。

（毎朝、鏡の前で表情の練習までしてるのに！）

セシルが微笑む。

「ぜんぶ、わかったわ、リーシャさん」

「くっ……どうやら、セシルさんには……き、気づかれてしまったようですね……」

声が震えた。

シュリが見つめている。

研修医や運転手が聞いている。

アルカンシェルでの日々を思い出して。

失われる光を想い。

涙がこぼれそうになる。

「わ、私は……ロ、ロイドさんが……」

――ロイドたち特務支援課が追っている、《黒月(ヘイユエ)》の協力者。

《銀(イン)》

東方人街の魔人。伝説の凶手。

「リーシャさん、ロイドとお付き合いしてるのね⁉」

「…………は？」

セシルが乙女な瞳をキラキラさせていた。

「さっきの表情を見て、ピン！　ときたのよ。あれは、恋人を想う顔だって」

「い、いえ……あの……」

「ロイドもリーシャさんも、ひと言くらい教えてくれればいいのに。あっ、それとも、最近、お付き合いするようになったのかしら？」

「ちょっ……セシルさん……？」

「ああ、そうだわ！　リーシャさんは、アルカンシェルのスターだもの。男性とお付き合いだなんて、絶対に知られたらいけないのよね⁉」

「まぁ、仮に、恋人ができたとしたら……劇団長に相談して公表するタイミングは選ぶと思いますけど……って、どうして、そういう話になってるんですか⁉」

「いいのよ！　ぜんぶ、わかったから！　ごめんなさい、私が軽率だったわね。これからは、影ながら応援させてもらうわ！」

もう彼女のなかでは、リーシャはロイドと秘密の関係にあるらしかった。

イリアが聞いたら、脚本のネタとして喜びそうだが。

（ああ……そういえば……イリアさんから〝天然〟とも評されていましたね、セシルさん）

脱力してリーシャは肩を落とした。この疲労感は、マインツ山道を登ってきたよりも酷い。

シュリが顔を真っ赤にして、拳を握っていた。

「リーシャ姉！　そうだったのかよ！　オレにもナイショだったなんて！　あ、でも、イリアさんは知ってるんだろ⁉」

「はぁ～……シュリちゃんまで……」

「あんなやつに、リーシャ姉はもったいないって思うけど！　でも、ほ、他のヤツよりはマシだし……オレ、反対しないから……」

「あ、うん……そっか……」

リーシャだって、ロイドのことは憎からず想っているが、恋人になったわけでもないのに、応援されたり、認められたりしても――

とっても切ない。

すごく恥ずかしい。

わりとみじめ。

しかし、ここで誤解を解くよりも、利用したほうが話が早そうだ。

（そうよね。私は《銀(イン)》――利用できるものはすべて利用する……それだけのことよね。うぅぅ～）

乙女心が痛すぎて、ちょっぴり涙が出てくるけれど。

リーシャはうなずいた。

「私、ロイドさんのところへ行かないと……わかってもらえますよね？」

「もちろんだわ！　恋人が応援してくれたら、きっと励みになると思うの。ロイドのこと、よろしくお願いね！」

「リーシャ姉……幸せになってくれよな」

「う、うん……行ってきます！」

顔を上気させているセシルとシュリと、ようやく息を整えた男たちに別れを告げて、リーシャは街道を戻る。

セシルたちの視界から隠れた。

次の瞬間――



黒衣の男が、大地を蹴った。



「だあああああッ！　タイガァーーーチャーーージッ!!」

ロイドは必殺技を叩きこんだ。

「ギョアアァァァァ～～～～～～!!」

絶叫をあげて、巨体が崩れ落ちる。グランドリューを一体だけ、ようやく退治できた。

しかし、目の前には、まだ三体もの魔獣が爪を光らせていた。

多くの攻撃を受け止めたランディが膝をついている。

ティオは魔導力も体力も限界のようだ。

毒に犯されてエリィの顔色が青ざめている。

ロイドは渾身の大技で、なんとか一体を倒したものの、残る三体を相手にするだけの余力は、もう残っていなかった。

「くっ……こんなところで……」

負けられるものか！

武器を握る手に力を込める。

そのとき、上のほうから、聞き覚えのある声が降ってきた。

「――無様だな」

「なっ!?」

振り向く。

街道をまたぐ形で吊り橋がかかっている。その支柱の上に、人影があった。

黒衣をまとい、顔を仮面に隠している。

歪められた声と、強烈な威圧感。

「あんたは……銀!?」

「ぐっ、くっ……やばいぜ、ロイド……こんなときに……」

ランディがうめく。

エリィとティオも武器を構えるが、戦う力など残っていなかった。

黒衣の男が、鼻で笑う。

「フ……その程度の雑魚に苦戦とは……相変わらず、非力な連中だ」

「ううぅ……」

ロイドには言い返すことができなかった。

銀が殺意を放つ。

「……まとめて、始末してくれる!!」

「どれほど強大な相手でも……俺たちは絶対に諦めない！」

ロイドは歯を食いしばる。

――どうする!?　今、大技を受けたら、俺もみんなも耐えられない！

銀が飛び上がった。
「我が舞は、夢幻……去り逝く者への手向け……眠れ、銀の光に抱かれ……縛ッ!!」
両手から幾本もの鎖が伸びる。
巨大なグランドリューたち三体の動きを封じた。
「ギョワ!?」
「ギュルッ!?」
「グルアァァッ!?」
悲鳴をあげ、身じろぎするが、魔獣たちが自由を得ることはない。
黒衣の男がローブ下から、巨大で幅広な刀を取り出した。
影が走る。
大刀が頑強な皮を裂き、肉を断ち、骨を砕いていった。
銀が裂帛の気合いを放つ。
「ズゥァァァァァァァァ……滅ッ!!」
「「「ギュァァァ～～～!!」」」
魔獣たちが絶叫した。
次々と倒れ伏す。
「な……に!?」
ロイドは自らの身体を確かめる。グランドリューとの戦いで負った傷はあるが、それだけだった。
「俺たちを……攻撃しなかった……のか？」
「フ……運だけはいいようだな」
相変わらず高い場所から、黒衣の男が言った。
助けられた？
まさか！
ロイドは問いただす。
「どういうつもりだ!? それに、どうして《黒月》に雇われているはずの銀が、マインツ山道なんかに!?」
「む」
「しかも、徒歩で……？」
「そ、それは……」
「それは……!?」
「……ハイキングだから」
「ん？ なんだって？」
わずかに沈黙があった。
銀が背を向けた。
「今、お前たちに教える必要は、ない」
「どこへ行くつもりだ!?」
「フ……この場で、お前たちを始末するのは簡単だが……手負いを倒すほど退屈なことはない……私を捕らえたいのであれば、せいぜい強くなることだ」
「ま、待て！」
ロイドの声も虚しく、黒衣の男は姿を消してしまう。

魔獣は消え、銀もいなくなった。
「くっ……」
気を張っていたロイドだが、戦いが終わった途端、痛みに膝をついてしまった。
「大丈夫か、ロイド!?」
「あ、ああ……ランディこそ……」
「ヘッ、俺は気力を溜めてたのさ。ヤツが近づいてきたら、一撃かましてやるつもりだったんだがな。逃げられちまったか」
軽口を叩く彼に、ロイドは笑いかけた。
ティオがエリィの毒を除去する魔法を使う。
「ふぅ……どうですか、エリィさん？」
「ありがとう、ティオちゃん」
「それにしても、銀の目的はいったい……あれでは、まるで、わたしたちを助けに来たようなものですが……？」
「不思議ね。伝説の暗殺者とまでいわれた銀が、とくに用もないのに私たちを助けるとは考えにくいけど……」
「妙ですね……」
エリィとティオがそろって首をかしげた。
ロイドは立ちあがり、武器をしまう。
「よし……ひとまず、セシル姉たちと合流しよう」
うん、と仲間たちがうなずいた。

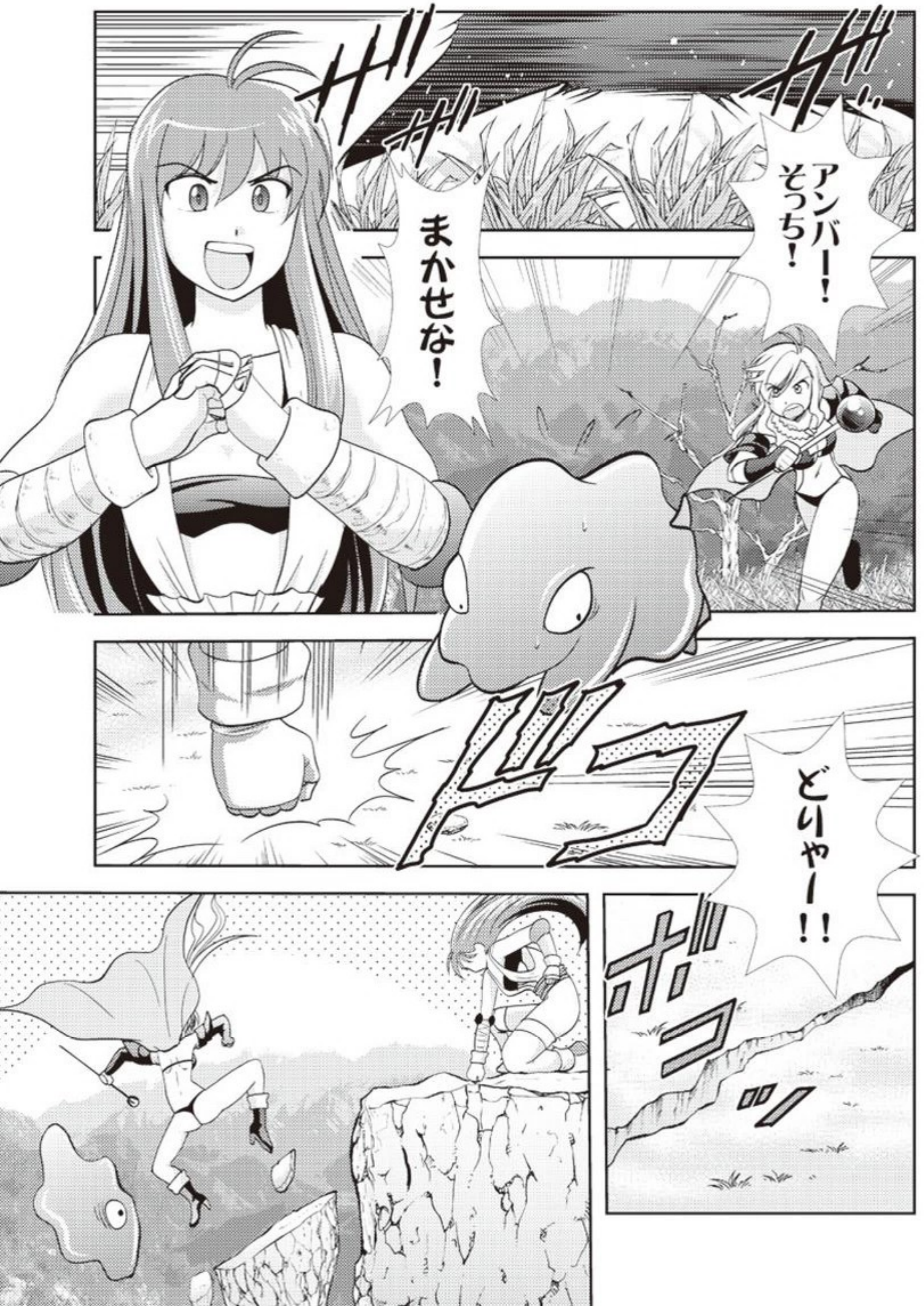


ロイドたちはクロスベル方面へと急いだ。
戦いになる前に休んでいた、見晴らしのいい場所まで戻ると、そこにセシルたちが待っていた。
リーシャ、シュリと、研修医のリットンとバスの運転手もいる。
セシルが手を振る。
「ロイド～!!」
「セシル姉、無事だったんだね！」
急いで駆け寄った。
「ええ、ロイドとみなさんのおかげね……ありがとう」
「俺も他の人に助けられたんだけど……なんにしても、よかったよ」
ロイドは心から全員の無事を喜んだ。
ティオが、「エニグマで、クロスベルに連絡しておきました。しばらくすれば、救護車が来ると思います」と告げた。
エリィとランディがため息をつく。
リットンが天に向かって感謝の言葉をならべたてた。
「おお、女神さま、ありがとうございます！ 助かった～」
運転手が怖々と訊いてくる。

「す、すみません……あの大型の魔獣は、どうなったんですかね？」
「一体は俺が仕留めましたけど……他の三体は、通りがかりの銀(イン)が倒してくれたんです」
リーシャがすごく驚いた顔をする。
「銀(イン)……って、あの銀(イン)が現れたんですか⁉」
「ああ」
「インってなんだ？」
そういえば、シュリは前の事件のときは、まだアルカンシェルに在籍していなかった。
「東方人街の魔人なんて呼ばれてる伝説の暗殺者らしいんだけどな」
「悪いヤツなのか⁉」
「クロスベルでは、まだ大きな事件を起こしてないけど……放ってはおけない相手であることは確かだよ」
「そんなヤツが、通りがかって助けてくれるなんて、変じゃね？」
シュリの疑問は当然だ。
ロイドたちも感じていた。
ぱたぱた、とリーシャが手を左右に振る。
「き、きっと、なにか事情があったんじゃないでしょうか？本人に聞いてみないと、正解なんてわかりませんし……深く考えても仕方がありませんよ」
「そうだな……」
ロイドがうなずくと、なぜかリーシャが吐息をついた。
セシルが、じっと見つめてくる。
「ロイド、リーシャさんとは、どういう関係なの？」
「え？　まさかセシル姉、また勘違いしてるんじゃ……俺とリーシャは無関係というか……知人……いや、友人くらいだと思うよ」
「あ、あはは……」
リーシャが複雑な笑みを浮かべた。
セシルは不服そうだ。
「さっき、リーシャさんはロイドたちの応援に行ったのではなかったの？」
「いえ、何度も説明しているとおり、戦いの様子を見に行ったんです……で、でも、怖くて近くまで行けなくて……」
「そうだったのか」
ロイドは冷や汗をかいた。あのグランドリューと戦っているとき、リーシャが来ていたら守る余裕はなかった。
シュリが明るい表情を見せる。
「ははっ！　まぁ、そんなこったろうと思ったぜ。おまえなんかに、リーシャ姉はもったいなさすぎるもんな！」
「俺だって、そんなに大それたことは、考えたこともないよ」
ロイドは苦笑する。
リーシャが首を左右に振った。
「そんな！　私なんて普通ですから、ロイドさんと不釣り合いなんてこと……あっ！　そ、そういう意味ではなく……!!」
「はは……ありがとう、リーシャ。そんなふうに言ってもらえるなんてうれしいよ」
「あ、う……」
リーシャは耳まで赤くなっていた。
ロイドはうなずく。
「たしかに、俺たちの間で上とか下とか言うのも変な話だな。これからもよろしく頼む」
「……はい」
どうやら恋人という仲ではないらしい、と納得してセシルは、ため息をついた。しかし、友人を得たことは喜んでくれているようだ。
シュリが、ロイドとリーシャの間に割り込んできて、ベタベタすんなよ～と邪魔をする。
エリィとティオが、いつもの調子でジト目になっていた。
「はぁ……あんなこと言って、自覚がないなんて……」
「……まぁ、天然ですから」
バスの運転手が、街道の先を指さす。
「救護車だ！　お～～～い！」
「おお、お助け～!!」
ずっと女神様に感謝を述べていたリットンが、両手をぶんぶん振りたくる。
ランディが荷物を担いだ。
「おっし！　行くか」
「ああ、戻ろう、クロスベルに！」
ロイドの言葉に、みんながうなずいた。

（ふぅ……）
リーシャは安堵の吐息をついた。
みんなが救護車へと乗りこんでいくのを一番後ろで眺める。
ロイドたちの言動から、疑われている様子はなかった。
証拠など残していないはず。
そっとリーシャはつぶやくのだった。
「…………大丈夫。バレてない……よね？」

第4話『リーシャと銀のハイキング』了


ザザ
ザザ
アンバー! そっち!
まかせな!
ドッ
どりゃー!!
ボゴッ


『ワンダラーズ フロム イース』
フェルガナじゃない方。基本PC88版で…。
横スクロールの『YS III』。
採掘場の奥でキラキラ輝きながら流れる
水脈とか、いっぱいにせまってくる山脈の雲
とか、夕焼けに染まるお城とか、サイドビュー
生かして魅せる場面場面が非常に美しく、
強烈な印象を与えます。
PC98版は、記憶が正しければ、EDデモ
だけ？400ラインで新たに描き起こされ
ていて、当時はまだまだ88LOVE!!
だった私も、それを見て、98グラフィックの
すごさを まざまざと思い知らされたり
したものでした（笑）。
（88は 640×200ドット。）
啄木鳥しんき
ファルコム大好き!


ワイルド
＆
セクシー
AIKYOU

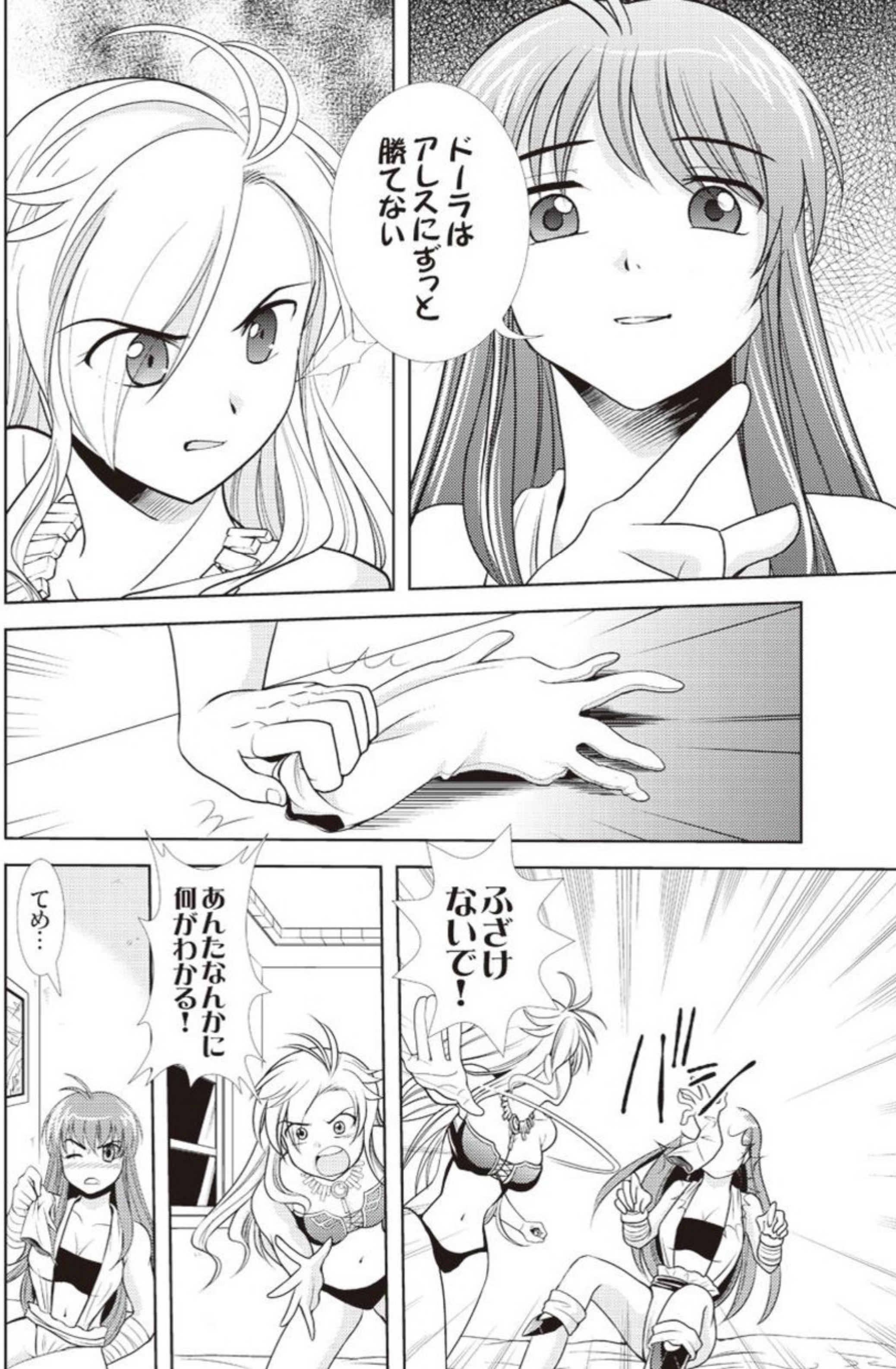

ギルド連絡所
この筋肉女——!!
あたしまで巻き込んでんじゃないわよ!
お前がノロノロしてるからだ!
まぁまぁ二人とも
結局あのモンスター逃がしたし
ドーラと組むんじゃなかったぜ
いい加減にしてください!
こっちのセリフよ——!!


二人にモンスター退治を依頼したのは私です
文句なら私に言ってください！
ミレイユ…
最近治安が悪かったので…感謝していますわ
まー…そう言ってくれるなら
単純なやつ
ところで逃げたモンスターが気になります…
何事もなければいいのですが…

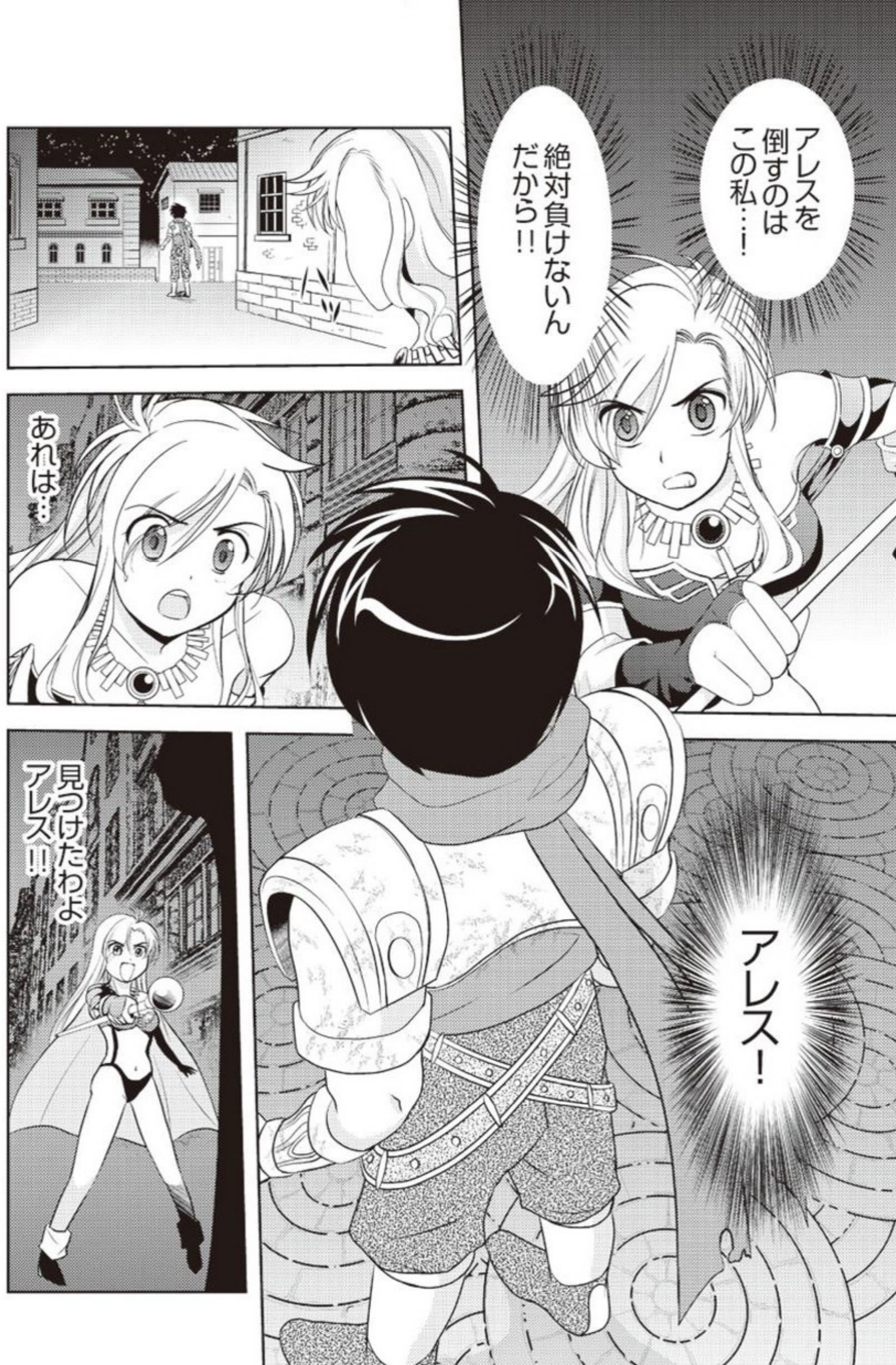

心配しないで
あんなのすぐに片付けてあげるから
俺がな
やれやれ…
……
……で
なんでドーラと相部屋なんだよ…
ブッブッ
そりゃこっちのセリフよ
ヒイィ!!
失礼ねー


そういえば
ドーラ　お前まだ
アレスのこと
狙ってんのか
当たり前でしょ！
私がヤツの息の根を止める！
もうギッタギタのケチョンケチョンにして…
アレスを追って3年
どうしたらあいつを倒せるのか…
ただ…

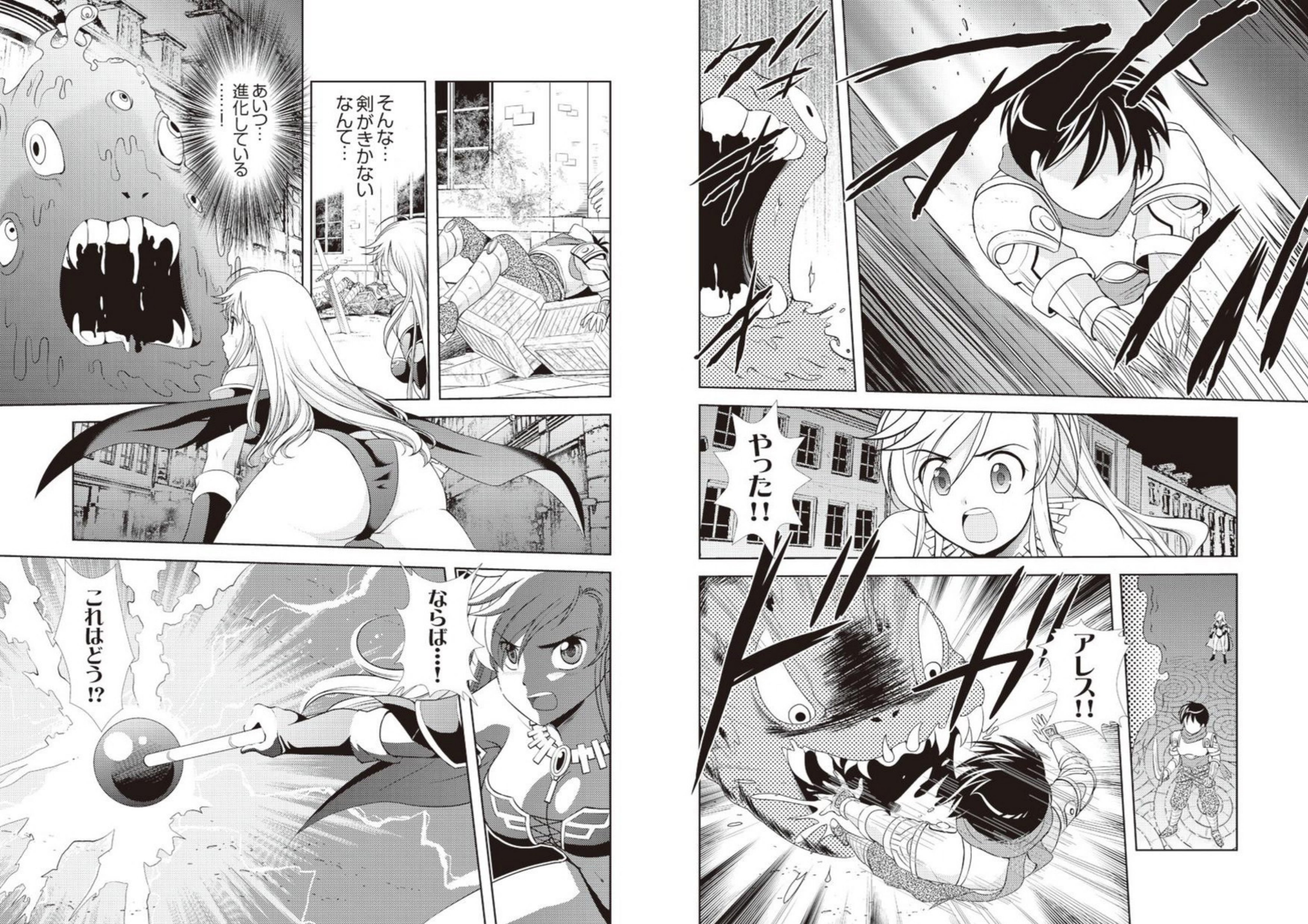

フン
そんな弱気じゃ話にならないし…
まー無理だろうな…
なにより奴を倒すのは私だもの…
ムカッ
一度負けたくせに何言ってんの
長年負け続けのお前に言われたかねえな
断言してもいいぜ


ドーラは
アレスにずっと
勝てない
ふざけないで！
あんたなんかに
何がわかる！
てめ…

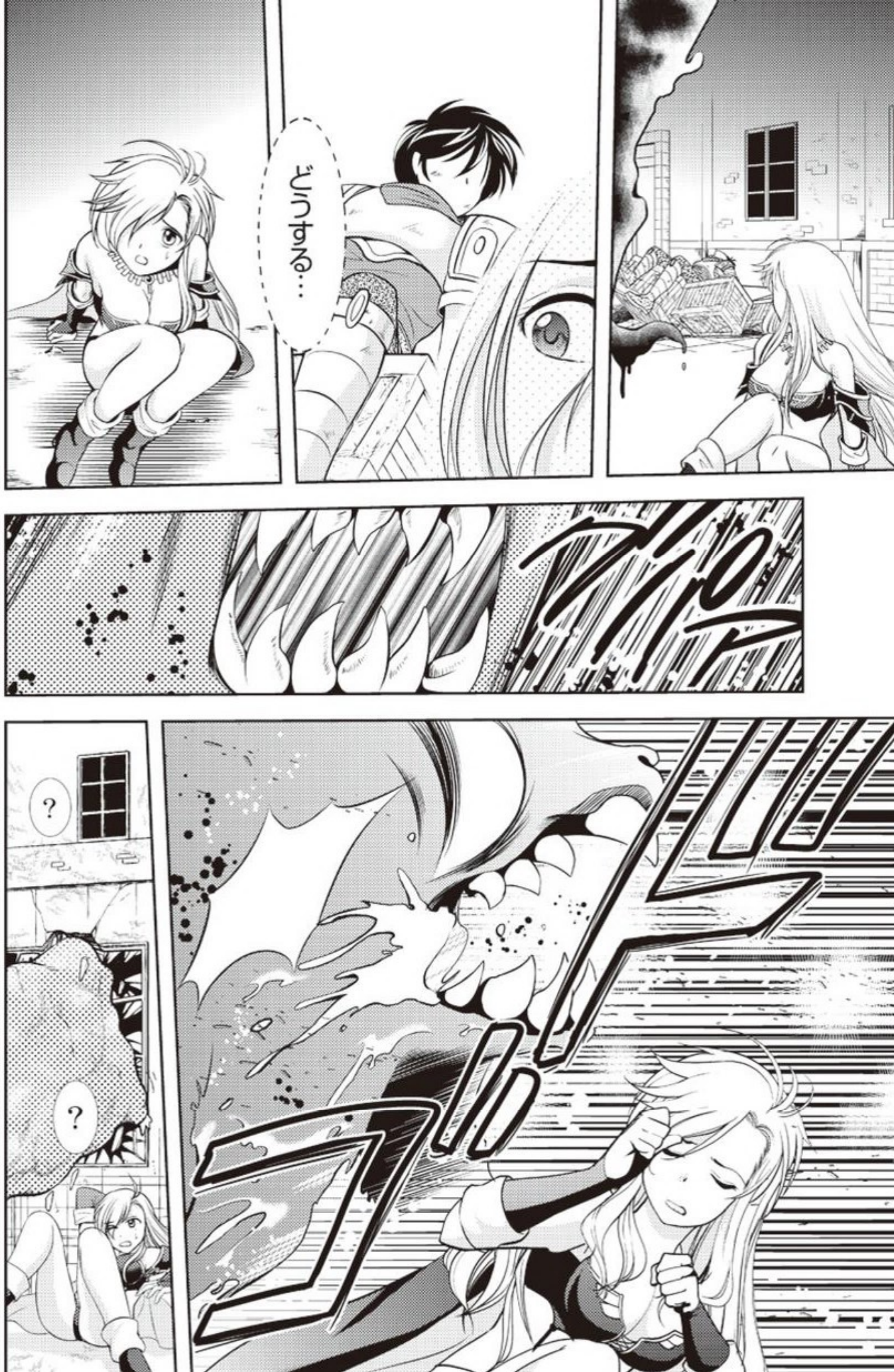

見てらっしゃい！
今すぐアレスをぶっ倒して
その後あんたも奴の後を
追わせてやるんだから！
できるもんなら
やってみな！
首洗って
待ってなさいよ
——!!
やれやれ
めんどくさい女…
アンバーの
奴！

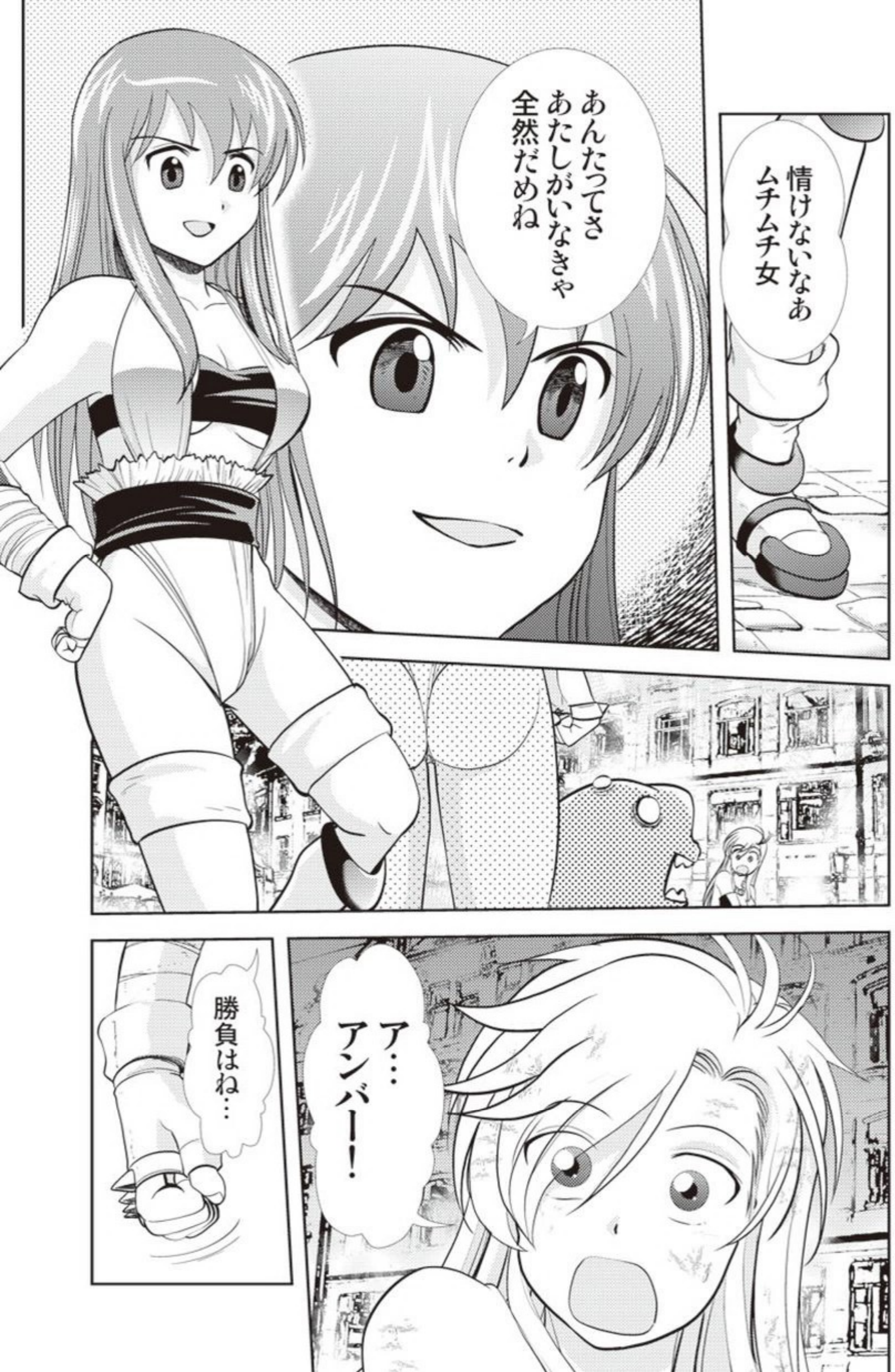

アレスを倒すのはこの私…！
絶対負けないんだから!!
あれは…
アレス！
見つけたわよアレス!!


あの時のアメーバ！
ハッ
アレス!!
ダッ


あいつ…
進化している
……!
そんな…
剣がきかない
なんて…
ならば…!
これはどう!?
やった!!
アレス!!

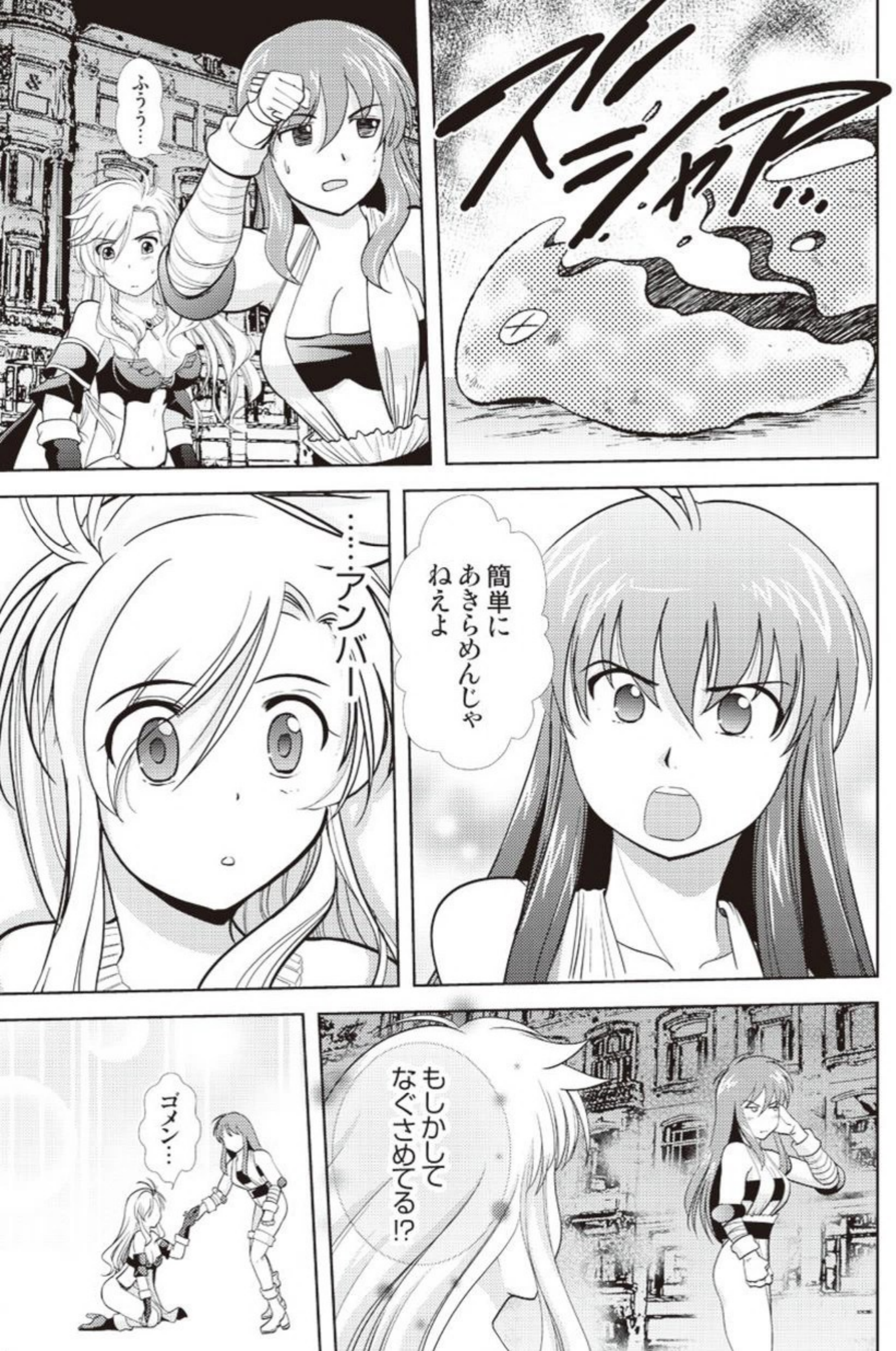

私はアレスと違ってよ！
剣よりも魔法ってね！
なんだ私が最強じゃ…
やった…アレスが倒せない敵を私が倒した…
うそ…
魔法までもきかないなんて…
こんな奴どうやって倒せばいいの!?


どうする…
?
?


情けないなぁ
ムチムチ女
あんたってさ
あたしがいなきゃ
全然だめね
ア…
アンバー!
勝負はね…


拳でつけるんだよ――!!!
今のうちに決めちまうよ!
何ボーっとしてんの!
ポカーン
そ そうよね
女王さまキック――!!
このこの!!
下等の分際で!!
ド ドーラ!?
あら 何かしら この感じ
ゾクゾク
超気持ちいいわ!!


弱って
きたわ！
トドメを！！
これでも
くらえ！！


ズシャア…
ふうう…
簡単に
あきらめんじゃ
ねえよ
……アンバー
もしかして
なぐさめてる!?
ゴメン…



2011年10月からから好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第30回-第31回　浅川悠（『零の軌跡 Evolution』イリア・プラティエ役）

30回、31回のゲストは、メインストーリーがフルボイスとなった『零の軌跡 Evolution』で初めて声が当たることになるイリア・プラティエ役の浅川悠さん。30回のゲストコーナーでは、イリア、浅川さんともに酒豪（?）ということで、お酒にまつわるクイズがおこなわれ、浅川さんはもちろんのこと、お酒好きが大好きな小寺さんのテンションが終始アガットしきりだった。そして、ニュースコーナーでは人形好きな水橋さんがティオのぬいぐるみんで大興奮。全体的にテンションが上がりどおしな収録となった。

▶第26回-第27回の舞台裏◀

第31回のトークパートでは、数々の名言が生まれたファルコムラジオの、第1回流行語大賞が発表された。受賞したのは「テンションアガット！」と、誰もが納得のひと言となった。これをきっかけに、もしかしたらアガット役の近藤孝行さんの再登場もあるかも!?

第32回-第33回　進藤尚美（『零の軌跡 Evolution』ソーニャ・ベルツ役）

32回、33回のゲストは、昨年発売された『ドラマCD 零の軌跡 第一章 ～神狼たちの午後～』で初めて声があてられた、ソーニャ・ベルツ役の進藤尚美さん。『零えぼ』収録時のエピソードが語られたほか、○○さんとの大人な関係（?）も明らかに!?　また、前回に引き続き、お酒大好きな小寺さんと進藤さんが日本酒トークで大盛り上がり。水橋さんや支援課メンバーも置いてけぼりで、地方のレアなお酒について、濃い話が繰り広げられた。

▶第28回-第29回の舞台裏◀

「出発！特務しえん課」のコーナーでは、5月12日に六本木ニコファーレで行われたライブイベントのレポートが届けられた。過去最大の盛り上がりを見せたライブだっただけに、インタビューを答えてくれてくれたファンの方も、過去最多の人数となった。

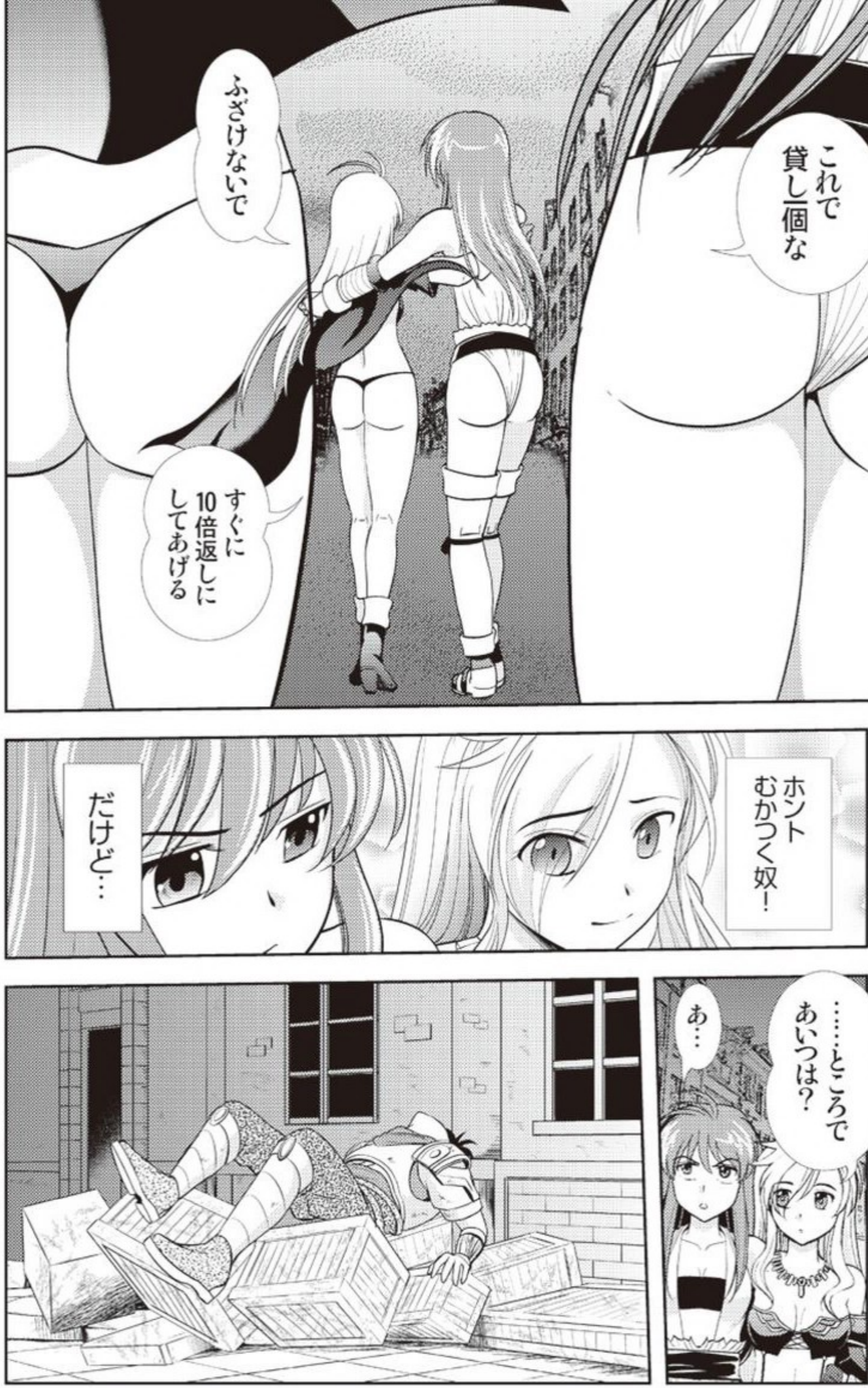


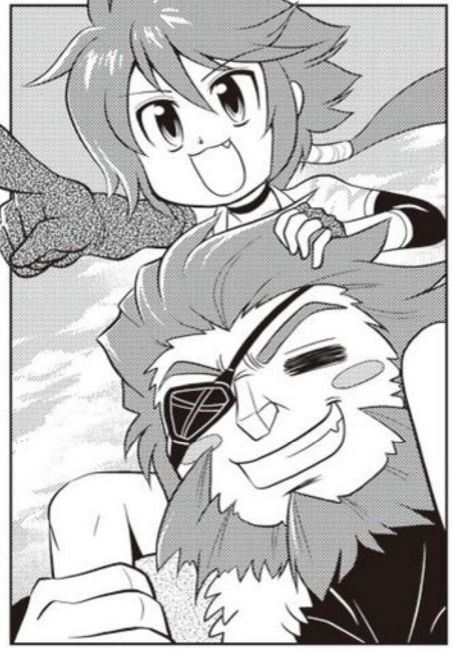


今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. / chara-ani





みんな集まれ！ファルコム学園

闘神もびっくり！
単行本7月発売決定！

新久保だいすけ

特務支援課の日常



そろそろ本気でjdkバンドの皆さんにあやまりなさいよ

リーダーの見解



仲間



父の遺言



闘神を継ぐ者



判断材料



忘却のレオンハルト



強そうな人



白騎士



末裔（まつえい）



正しくは「末代」だよなそれ。

こじらせた人



バカと王子



潜入調査



黒いんです



決定



英雄伝説 空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

『突撃！ メイベル市長の華麗な一日』（後編）

著：はせがわみやび

7.

ドロシーとナイアルは居酒屋『キルシェ』を出た。
目指す市長邸は、通りを南に下った先。
あたりはだいぶ薄暗くなっていたけれど、石畳の通りにはまだ人の流れがあった。
角に立つ街灯には、もう明かりが灯っている。のっぽが万歳をしているような格好の細長い灯りの柱が、頭と両手の先に備えたガラスの球体から、まぶしい導力灯の光を周囲に撒き散らしていた。
「でも、返してくれるんでしょーか」
「返してもらう。意地でもだ。このまま引き下がってられっか！」
不安を吹き飛ばそうとするかのように、前を歩くナイアルが語気を強める。
いや、実際、吹き飛ばそうとしてくれているのだろう。
ドロシーは知っている。
口は悪いし、目つきも悪いし、すぐに自分をポンコツ扱いするけれど、ナイアル・バーンズという男は、こう見えて色々と気配りをしてしまう性分の持ち主なのだ。
優しい、とも言う。
本人の前では決して言おうとは思わないが。
――だって、絶対全力で否定しますもんねぇ。しかも、数日はへそを曲げて怒ったふりをするに決まっています。

そんなことを考えているうちに、ドロシーたちは市長邸の前まで来ていた。
左右に立つ厳つい門柱に挟まれた鉄柵の門は、案の定というか当然というべきか、夕方をとっくに過ぎたこの時間ではしっかりと閉ざされていた。
たぶん、鍵も閉まってる。
呼び鈴を鳴らせば誰か出てきてはくれるだろうが、果たして門を通してくれるだろうか。
ここまで来て、ドロシーはようやく頭が冷めてきた。
ちょっと無理っぽい、ような。
「せ、先輩……やっぱり無謀ですよぅ」
「何びびってんだよ！　おら、行くぞ！」
そうドロシーに言ってから、ナイアルは力任せに呼び鈴を叩き、あろうことか大声でこう言った。
「たのもぉおおおお！」
「センパイ、それじゃ、道場破りですぅ！」
慌ててナイアルの服の裾を引っ張ったが、時すでに遅し。
ぉぉぉ、と、ナイアルの言葉は木霊となってあたり一帯に響いてからゆっくりと消えてゆき――。
広い通りの向こう、就寝していたらしき真っ暗な家々に明かりがぽつぽつと灯った。
これはまずい。と、ドロシーは思った。
明かりの灯った家の窓が引き上げられる。「うるせえぞ、バカヤロー」高級住宅街にはあまりふさわしくない怒声が聞こえてくる。
――も、もも、もうしわけないですぅ！
暢気者のドロシーでも、さすがに肝が冷えた。
あんまりナイアル先輩に呑ませちゃだめだ。
心に固く誓う。次に呑み過ぎそうになったら、絶対止めよう。本気で止めよう。じゃないと身がもたない。
「やれやれ……困った記者さんですね」
呆れたような声に慌てて顔を向ける。
――い、いつの間に！
メイドがひとり、鉄柵の向こうに立ってナイアルと睨みあっていた。
鼓動、三つか四つぶんほどだけ。
しん……と、あたりに夜の静けさが戻った。
その静寂を破って、がらがらと門を引き開ける音が鳴る。
ナイアル先輩とメイドを隔てていた柵がなくなった。けど、ふたりは相変わらず睨み合ったままだった。
――この人は、確か、リラさん。
朝、ナイアル先輩を毛虫のごとく追い払ったメイドさんだ。
「このような夜更けに、人目もはばからず遠慮もせずいったい何の御用でしょうか、記者ナイアル・バーンズ殿」

「返してもらいにきた」
「はて？　あなたに何かを借りた覚えはないのですが」
「あんたに言ってるんじゃねぇよ！」
「えっ、でもカメラを持ってったのはこの人ですよ、先輩」
　と、思わずドロシーは言ってしまったのだけど、余計に事態をややこしくしただけだったようだ。
「ただのメイドがオーバルカメラを欲しがるかよ！」
　律儀にナイアル先輩が突っ込み、リラさんがさらにそれを受ける。
「それは全メイドに対する侮辱です、ナイアル殿。我々はお仕えする主人のために常に世の中の新しいものに対して目を配っているものなのです。あの最新式のオーバルカメラは充分に興味を引く対象かと」
「メイドさんってすごいんですねー！」
　感心したら怒られた。
「おまいは何を言ってるんだ。ちげぇ！　そういう意味じゃねえっての！　指図したのは市長のほうに決まってるだろ！てか、やっぱわかってんじゃねえかよ！」
「当然です」
　しれっとリラさんが言った。
「からかっていただけですから」
　にこりともせずに言われて、先輩が絶句する。指先でリラさんを指したまま、口をぱくぱくと開けたり閉じたり。
　声も出ない。
　――ふわわ。なんか、やっぱりすっごい人ですよ、この人！
　リラさんはくるりと背中を向けると、すたすたと屋敷に向かって歩きだした。
「お、おい、待てよ！　こら！」
　すたすた。
「て、てめ――」
「よろしいのですか？」
　と、顔だけをこちらに向けてリラさんが涼やかな声で問いかけてくる。
　そのひとことで、先輩は声を荒げようとしていた矢先を制されてしまう。
「――え、な、なに、を」
「カメラを返して欲しいのでしょう？」
　言いながら、屋敷の入り口へと続く短い階段に足をかける。まるで彼女のことを見張っていたかのように、すっと、音もなく内から扉が開いた。
　導力灯の明かりが庭へと漏れ出てくる。
　まぶしい光の内へと歩きながら、ボース市長付きメイドのリラは、背中越しに言い放ったのだった。
「先ほどからメイベルお嬢様がお待ちです。どうぞこちらへ」

　かすかにこちらに向けた彼女の口許に、小さな笑みが浮かんでいた。

8.

「ちっ。なんだってんだ……」
　怒りを押し殺しつつも、他に何かできることがあるわけでなく、ナイアル先輩はリラさんの後を追って大股で歩き出した。ドロシーも慌てて続く。
　――待っていた？　……わたしたちがくるのを？
　考えてもわからなかった。
　仕方なく、ドロシーも疑問を取りあえず棚にあげて扉をくぐる。
　入った先は吹き抜けの大きな広間になっていた。正面に濃い色のお仕着せを着込んだ男が立っていた。ドロシーたちを目にすると、深々と腰を折る。
「ようこそ、ナイアル様、ドロシー様。執事のメントスと申します。以後、お見知りおきを」
「ナイアルだ」
「ド、ドロシーです」
「お嬢様……市長は、二階の奥の間でお待ちでございます」
「あ。は、はい」
　あれ、と思ったのはあっという間にリラさんの姿が見えなくなっていたからだ。
　とまどってしまうけれど、二階、というのはすぐにわかった。
　左手に階段が見えている。あれを昇るのだろう。
　赤い絨毯が敷かれた階段を昇る。中央の吹き抜けに向かって張り出した形の回廊へと辿りつくと、ぐるっと回った先に扉が二枚見えた。
　奥の部屋と言っていたから、たぶん遠くに見えるほうの扉に違いない。
　――勝手に歩いていってしまってよいのでしょうか。
「おい。行くぞ」
「ああ。待ってくださいよぅ」
　一瞬の躊躇もなく進む先輩記者は度胸があるのだか無鉄砲なのだか。
　それにしても……広い屋敷だった。
　さすがは商業都市で最も大きな商業施設を所有する市長の家というところ。張り出し廊下の幅だけでも、人が五人は横に並べそう。
　緑の好きな主らしく、屋敷の中だというのに、あちこちに鉢植えの観葉植物が飾ってあるのが見てとれた。
「ミラかけてやがるな……」

「ですねぇ～」
　奥の扉まで辿りつく。
「邪魔するぜ！」
　ノックもせずに押し開けた。
「せせ、せんぱい！」
「こんばんは、ナイアルさん、ドロシーさん」
　部屋の主がにっこりと笑みを浮かべた。
　ノックも無しに入ってきたのにそう言ってくるのだから、足音だけで誰が来たかわかったということなのだろう。
　開けた扉の向こうには、平服ではなく、昼間見た通りの余所行きの外着をぴしりと着込んだメイベル市長が、椅子に座って待っていた。
　欠片も驚いていない。
「不意打ちもできず、かよ……」
　ナイアル先輩がつぶやく。
「――って、ノックなしはワザとですか！　度胸ありすぎですよぅ、先輩！」
　仮にも市長である。名士なのだ。
「はぁん。そういうことかよ……」
　無謀先輩がつぶやく。
「……何がそーいうことなんですか？」
「市長は、どうやらおまえの撮った写真に用があったらしいってことだよ」
　――はい？
「なんで、そんなことがわかるんです――かって、ああ！　それわたしの！」
　ようやく気づいた。
　座っている市長の前。大きなテーブルの上に散らばっているのは、あれは自分の撮った写真じゃないか。
　まさか、もう記憶子である感光クオーツを取り出して焼き付けまで済ませてしまったということだろうか。
　メイベル市長が椅子から立ち上がってにっこりと微笑んだ。
「そうです、あなたの写真ですよ、ドロシーさん」
　対面に用意されていた椅子に座るようにと促しながら、若き市長は「見事な写真ばかりです」と誉めてくる。
　自分としては不本意な出来だったのだけれど、メイベル市長は満面の笑みだ。
　――どういうことでしょう？
「話してくれるんだろうな？」
　無鉄砲先輩の遠慮ない物言いに、メイベル市長が言う。
「もちろんです。ただ、あまり時間がありませんので、手短に」
　時間……？　と、ナイアル先輩は市長の言葉を聞き咎めたものの、話を聞く事を優先させたようだ。

「南街区の強盗事件をご存じですか？」
　と、前置き抜きで市長に言われて、言葉の意味が頭に染み込むまで少しかかった。
「……強盗事件？」
「知ってるぜ」
　ナイアル先輩は椅子に座りつつ頷いた。
　そういえば、と、ドロシーも思い出した。これでもいちおう新聞社のカメラマンである。ボース市の南側の地区で起きた事件だ。
　確かまだ解決していないはず……。
「ボースは商業都市ですから大陸のこの地域の富が集まってくるわけです。ゆえに――それを狙われることも多く……。南街区の事件は遊撃士協会のほうにも調査をお願いしているのですけれど、その事件も収まらないうちに――」
「何か新しく問題が起きたってのか？」
「はい」
　柔らかな笑みを浮かべていたメイベル市長の顔がすっと引き締まる。
「今度は、ボースマーケットが狙われているのです」
　えっ、と驚いた。
　マーケットが。
　狙われている？
「……誰に？」
　ナイアル先輩の声も厳しくなった。緊張している。
「盗賊団です」
「盗賊……」
「しかも、ただの盗賊団ではありません。魔法盗賊団です」
　は？
　魔法？
　盗賊団？
「えええええええ!?」

9.

「その計画があることを、メイベル様は早くから突き止めていらっしゃいました」
　いつの間にか姿を現したリラさんがテーブルの上に香茶を並べながら言った。香茶というのは香草を用いたお茶だ。金色の液体は口に含むと鼻に抜けるちょっとすっきりする香りをもっていた。
「美味しい」
「ボースではマーケットでも売っている紅いお茶……紅茶が有名ですけれど、こちらもお奨めです。眠気覚ましのために、少量のミントを混ぜてあります」

「あ、だから、すっきり味なんですねー」

「なごんでんじゃねえよ！」

「いたた。だから先輩、なんで女の子の頭をポンポン叩くんですかぁ！」

「おまえに緊張感がねえからだろうが！」

むすっとした顔のまま横暴先輩が言った。

メイベル市長がそれを見てくすりと笑みを浮かべる。うう、美人さんの前で恥ずかしいじゃないですかぁ。

「で、だ。話を戻すぞ」

そう促されて、メイベル市長が話し始めた。

「これを見てください」

彼女がまず指で示したのが、テーブルの上の一枚の写真だ。ドロシーもしっかり覚えている一枚。市長を撮ろうとしたら、前にひとり邪魔な人影が写ってしまったヤツ。

あのときは、そう――ドロシーはよく覚えている。

シャッターチャンスだと思った瞬間に、市長は顔を背けてしまったのだった。

「職業柄、人の視線には敏感なものですから」

さらっと市長が言った。

そう言われて、さすがに気づいた。

「わたしたちが見ているの……わかっていたんですか！」

にこっと微笑まれてしまう。

――ど、どういうことになるのでしょう、それって。

「ってことは俺の取材を断ったのもわざとか」

「はい。ただ、もちろん当てにはしていませんでした。ドロシーさんのような名カメラマンがいると存じあげませんでしたし。ナイアルさんが引き下がらない性格だろうことは把握できたのですが。どちらかと言えば陽動に付き合っていただきたく……」

「陽動。ちくしょう。そういうことかよ……」

「あのー」

ドロシーはお代わりした香茶をずずっとすすってから尋ねる。

「よく……わからないんですけど」

そう尋ねると、だからな、と、苦労人先輩がため息をつきつつ解説してくれた。さらにメイベル市長が補足を入れてくれる……。

つまり――。

ボースマーケットを狙う盗賊団はひと月前からマーケットにたびたび潜入しにきていた、らしい。下見というわけだ。

そのことに気付いたメイベル市長は、不審な客たちを逆に密かに観察していた。

ただ、あからさまに見つめては気づかれてしまうわけで。

「店を視察に来てる市長が、特定の客ばかり見つめていたらばれちまうだろ？」

「でも、そろそろ彼らが計画――つまり、強盗を実行しようとしていることは、何となく感じ取れていたんです。だから、少しでも彼らについての情報が欲しくて……」

「俺たちの尾行を利用したわけか」

「はい。おふたりのように、あれだけ目立って騒々しく後をつけてきてくださいますと、わたしとしても振り返ったり、キョロキョロしたりしても不自然ではなくなるわけなんです……あ、ごめんなさい」

尾行下手と言われた先輩が、ぶすっと今までで一番のふくれっつらになった。

しかし――ってことは……。

メイベル市長の言葉を信じるならば、ドロシーたちの尾行は市長に気づかれていただけでなく、あのマーケットにいた人たちの多くに気づかれてたってことに……。

カメラ越しの人物の視線がどこを向いているかは気にしても、ドロシーは自分が見られているかどうかなんて気にしたことがなかったのだ。

なんだか、ものすごく恥ずかしい、ような。

「うひゃあ！」

「いきなりわめくな！」

「あいたたたた！」

また、はたかれた。

これはひょっとして職場内暴力なんではないでしょうか。ううう。

「それで、カメラマンの方が同行していることは、こちらのリラからも報告を受けておりましたので――」

と、突然叫び声をあげたわたしにも動じずに市長さんは言った。

「様子の不審な人たちをなるべく、ドロシー様とわたしとの間に置くようにしていたのです。ドロシー様には余計な人を写したくない思惑はあったと思いますけれど……」

あ、とドロシーはそう言われてようやく気付いた。

そういうことか。ドロシーとしてはメイベル市長だけを写した写真がベストだったけれど、市長の思惑はそうではなかった。余計な周りの人物まで写して欲しかったわけだ。

ドロシーとしても何も写さずに帰るわけにはいかなかったから、ベストは無理でもベターであればシャッターを押してきたけれど、それはまんまと市長の思惑に嵌ったということか。ぜんぜん気づかずに乗せられてしまった。

隠し撮り、というあまり経験のない状況でなければ、ひょっとして気づいていたかもしれない……。

そうか……そういうことだったのか……。

「うまくいけば、不審な人たちが写真の片隅にでも写ればよ

いな、と。まあ、かすかな期待以上のものではなかったのですけれど……」
　メイベル市長が言った。
　それは当然だろう。写真というのはピントを合わせるのが大変なわけで、つまり、市長を写そうとしているかぎり、たまたま写りこんだ周囲の人間がはっきり映るはずがない。ボケた絵にしかならないはずなのだ。
　ところが予想以上の成果があった。
　そう言ってメイベル市長が示した写真は、ドロシーが市長の背後に胡乱な人物を見つけたときの写真だった。なぜか店のバッグヤードのほうばかり覗いているように見えた男。
　ドロシーが思わず可愛くない、とつぶやいた、あの男。
ピントがしっかり合っていた。
　ひげ面の顔がはっきりと映っている。
「この人物は、王国の指名手配書に載っている男です。ヴォルグ、と名乗っているこの男こそ、盗賊団《風の狼》の首領なのです」
「風の、狼……。神出鬼没で、今まで一度だって押し入って捕まったことがないって噂の、あの……魔法（アーツ）を使いこなすと噂の盗賊団か……」
　ナイアル先輩の声が掠れた。
　ひとつ大きく息を吐いてからメイベル市長が立ち上がった。
「あなたたちを利用させていただいたことには謝ります。ごめんなさい。でも、おかげでギリギリ間に合ったようです」
　深々と頭を下げる。
　ナイアル先輩が市長の言葉の端に引っかかった。
「ぎりぎり？」
「はい」
　そのときドロシーは不意に思い出した。
　先ほどメイベル市長は言ったのだ。
　あまり時間はない、と。あれは――あの言葉の意味は……。
「彼らの計画の実行はおそらく今夜」
　メイベルの凛とした声に、心臓が思わずどきんと跳ねる。
　こん……や……。
「何故わかる？」
「《風の狼》について唯一知られている事があります。彼らの犯行はすべて月のない夜に行われているということです」
「月のない夜……」
　ナイアルの押し殺した声。
　あ、とドロシーも口を丸く開ける。
　そうだった。今日は夜に入ると、すぐに街燈に灯が点っていたっけ。あれは何故かっていうと、今夜が月のない日だったからだ。
　星明かりだけの暗い夜。
「ボースマーケットが襲われるのは今夜です」
　商業都市の敏腕市長が確信を込めて言い切った。

10.

　西ボース街道へと続く街の門から、歩数にすれば二百歩ほど。一セルジュはたっぷりと離れた森の中から街の様子を窺う男たちがいた。
　闇の中に、六人。
　いずれも人相の悪い髭面の男ばかりだ。
　着ているものは皮の鎧。腰には短剣。
　その中のひとり、もっとも目つきの鋭い男。
　ヴォルグ、と仲間内では名乗っている。
　にぃと唇を歪めて笑みを浮かべてから口を開いた。
「野郎ども、いいか？」
　残りの五人は黙って聞いている。
「ボースは宝の街だ」
　こくっと、一斉に五人が頷く。
「あそこにゃあ、古今東西の逸品が――」
「？」
　五人が首を傾げた。
「あー。……大陸あちこちの古い宝から新しい宝までが――」
「おお！」
「――揃っている。しかも、ひとつの建物の中にだ」
「おおおお！」
「《風の狼》としてもだ。この『おしごと』に成功すりゃあ名も上がるってもんだ。近頃じゃあ、空賊なんてぇのも出てきているようだが……。なあに俺たちの敵じゃねえ！　野郎ども、しくじるんじゃねえぞ！」
　ひときわ大きな歓声があがった。
　そうして男たちは動き始めた。
　外灯が立つ街道を避け、灯りの届かない陰から陰へ。
　男たちの行動はあらかじめ全て打ち合わせてあったようで、互いにひとことの言葉も発しない。やりとりは指を使った信号と交わしあう視線だけ。
　門を避け、警備の目の届かない壁を乗り越えると、夜の闇にまぎれてボース市の中へと忍び込んだ。
　彼らの潜入に気づいたのは空の星たちだけだった。

11.

　ボースマーケット内。

日用雑貨の並ぶ金物屋の屋台の陰にナイアルは腰を屈めて潜んでいる。

そろそろ真夜中だ。

中の照明は落ちていて、あたりは闇が支配していた。

天窓から差し込む星明かりだけが頼りの暗がりで、ナイアルは己の心臓の鳴る音を聞いていた。

――本当に、今夜なのか？

マーケットへの襲撃を市長は月のない今夜だと予想していたが、果たして――？

そっと目だけを出してあたりを伺う。

あちこちにメイベル市長を筆頭に自警団の連中も隠れているはずなのだが、ナイアルには感じ取れない。

段々不安になってくる。

ひょっとして、市長にまた一杯食わされたんじゃなかろうな？　そんな想いまで沸き上がってくる。

利用されたことを許す代わりに、ナイアルは、市長の計画した大捕り物の取材を申し込んだ。ぶっちゃけて言えば、盗賊団の襲撃とその逮捕の場面に立ち会わせろとねじ込んだわけだ。

危険だからと断ろうとした市長だが、そこはナイアルも粘った。ここで引いては事件記者は名乗れない。事件を取材できない事件記者なんて魔獣を退治しない遊撃士と同じだ。存在価値がなくなっちまう。少なくとも、ナイアルはそう思っていた。

店内に籠もっていた昼の熱気が徐々に冷めてきた。もうすぐ真夜中なのだから当たり前かもしれない。酒も抜けてしまったようで、少し肌寒く感じる。こうなると、呑んでばかりで、ちゃんと食べてこなかったのが悔やまれる。

「腹減ったな……」

聞こえるか聞こえないかのかすかな声でつぶやいたつもりだったが、返事があった。

「ほーふぇふか？」

くぐもった声だ。

ナイアルは屋台の裏で振り返った。

彼の背後にいるひとりの少女が腰をぺたんと床につけて口をもぐもぐさせていた。

「なに、食ってやがる！」

言わずと知れたドロシーだった。

「はふでふ」

「ああん？」

これです、と言いたかったらしい。

ドロシーが手に持ったそれを見せてくる。窓からの星明かりだけではよく見えないが、スポンジ状の食べ物だ。

ごっくんと呑みこんでから、

「張り込みにはパンですよぅ」

と言いやがった。

「パンじゃねえだろ……おい」

「だから、パンが無ければお菓子にすればいいのです。似たようなものですし……って、リラさんが言ってました。あ、これはリラさんからの差し入れで――」

「聞いてねえよ」

――大声でつっこみてぇ！

待ち伏せ中でなければ遠慮なくわめいていたところ。

いつの間にかドロシーは、ふわふわタマゴのカステラこと『スイートカステラ』をリスのように口の中に詰め込んでいた。呑み込みきれない分で頬が膨れている。リスの餌袋か、おまいの頬は！　と左右から引っ張ってやりたくなった。

天才はわからねぇ。

さっきまで少々落ち込んでいたと思っていたのだが、今は平気な顔をしていやがる。

景色の表情が見えない、とか悩んでいたようだが。

まあ、あれだな――。

「ムカデの二人三脚ってやつか……」

ぽつり、漏らした言葉をドロシーが聞き咎めてきた。

「なんですか、それ？」

「ムカデっているだろ？　脚が百本あるっていう」

ドロシーが顔をしかめた。虫が苦手なんだろうか。

「そ、それが？」

「昔話だよ。ムカデが人間と二人三脚をすることになった。人間に『足を出してくれ』って言われて、どの脚を差し出すべきか悩むんだ」

「……百本ありますもんねぇ」

「で、転ぶ」

「ああ――それはまあ。え……それがどうかしたんですか、先輩」

「いや、なんでもない」

百本の脚を自在に操るムカデが、たった一本の足を出してくれと言われただけで混乱する。

普段あたりまえにやっていることだからこそ、わずかなきっかけで壊れる。

天才ゆえの、ちょっとしたスランプってやつだったのかもしれねえな。

ナイアルは改めてドロシーを見た。

彼女の首からは細い紐が下がっていて、その先にはオーバルカメラが繋がっている。

愛用のカメラを返してもらったからか、それとも自分のカメラ技術のせいでベスト写真が撮れなかったわけではないと知らされたからか。

すっかり元のドロシーに見える。

危ないからホテルで待っていろ、とのナイアルの言葉も、『カメラがあるのにカメラマンがいないなんてあり得ません』などと言って引かなかった。

「はい、センパイ！」

「……なんだ」

「おすそ分けです。まだ、ひとかけら残ってます～」

手のひらの上のカステラの欠片。

ほんとにひとかけらだった。

「い、いらねえっての！」

「またまたぁ。先輩、お腹鳴ってましたよ？」

「鳴ってねえ！」

思わず声を荒げてしまい、しぃ、っとたしなめる声が耳を打った。

視線を上げると、メイベル市長が腰に手を当てて睨んでいた。

「お静かに願いますね？」

「お、おう」

わりぃ、とナイアルは口ごもる。

——やべぇ。俺としたことが。

これでもし張り込みが失敗したりしたら、取材拒否どころの問題じゃねえぞ。

「あはは。怒られてしまいました。失敗失敗。反省ですね—」

「笑いごとじゃねえ……てか、ほんとに反省してるのか……？」

なんつー、能天気娘だ、こいつは。

わかっていたが、改めてナイアルはドロシーを見て思った。

大物だ、こいつは。

ため息をついた、そのときだ。

西の出入り口のほうからかすかな音が聞こえた。

12.

六つの影がマーケットに辿りついた。

《風の狼》の一団だ。

盗賊団は、ボースマーケットに西側から近寄り、閉ざされた入り口の扉へと辿りついた。

それは導力で開く分厚い扉だったが、男たちのひとりが腰のポーチから取り出した携帯型のオーバルトーチで扉の一部を丸く焼ききった。鍵の部分を壊され、重い扉はきしむような音を立ててこじ開けられる。

頭領のヴォルグが全員の顔を見回してから親指を立てる。

手下たちが頷いた。

親指を下へと打ち下ろすと、それが合図だったようだ。

彼らは全員が遊撃士が持つような導力器を腰の革帯に備え付けていた。その戦術オーブメントにセットされた結晶回路を指でなぞりあげたのだ。

導力器は個人ごとに調律されるし、クオーツの構成も個人ごとに異なる。従って駆動できるアーツもそれぞれ異なるはずだった。けれども、彼らは互いの使える導力魔法をよく把握していて、唱えられない魔法は互いに融通してかけあう手筈になっていた。

クロックアップ改。

そう名付けられている導力魔法が最初に発動した。

盗賊たちの頭上に次々と光の円陣——魔法陣が現れ、円に重なるように時を刻む幻影の針が現れた。巨大な針が頭上でぐるぐると回り始める。

白い羽が飛び散り、翼の音が鳴った。

鮮やかなアーツの光が闇を散らして男たちに降り注ぐ。

時、の属性を持つクオーツによって導かれる魔法の力が現実を捻じ曲げた。

盗賊たちの手足の、身体の動きが風のように素早くなり、目で追うのが困難なほどになった。時の流れが加速したのだ。

六人は疾風のようにボースマーケットへと躍り込む。

《風の狼》。

ヴォルグの率いる盗賊団がそう呼ばれる所以がここにあった。

初めに彼らに気づいたのは、潜んでいた自警団の人間ではなく、丁度出入り口近くを定時巡回で訪れた衛視だった。

アーツの光を封じ込めた角灯——オーバルランタンを手にして見回りをしていた衛視が、空気の流れを感じた。暗闇の中、気配を頼りに角灯を振る。

ぼうっと人影が浮かび上がった。

「ど、どろぼ——」

声をあげようとする衛視に向かって、盗賊のひとりが腰の結晶回路を素早くなぞりあげ、指先を突きつける。意志の力と身体の動きを通して、導力の向かう先を固定させたのだ。

アーツが発動し、衛視の男へと降りかかる。

闇を切り裂いて白い光の束が男の足下から頭上へと向けて迸った。顎先から照らされた逆光の中で彼の表情が恐怖に凍りつく。

「ひっ——う、うわ——」

アーツに包まれた衛視の身体が白い光の中でゆらゆらと揺れて見えるのは、時間の揺らぎが発生したためだ。細かく乱された時の流れに身体が巻き込まれ、吐き気と目眩が耐え難いほどにまで増加してゆく。

白く濁った空気の中、ちかちかと明滅するような幻が目の

前に浮かびあがり、意識が遠く遠くかすれてゆく。
「う、うぁ――」
衛視の悲鳴が中途で切れた。
時の流れを乱していた白い光が消えるとともに、どさり、と身体が床に崩れ落ちる。
白き滅びの地（ホワイトゲヘナ）へと誘（いざな）われた衛視の意識は、これで半時は戻ってこないだろう。
闇の中で、盗賊たちが声もなく笑った。
そうして彼らはマーケット中央の噴水広場まで辿りつく。
ヴォルグが、中に押し入ってから初めて言葉を発した。
「いいか、野郎ども！」
その声がやや甲高く響く。加速した時の流れの中にいるからだ。だが、全員が同じように加速しているので、仲間たちの間ではいつも通りに聞こえるのだった。
「食い物とか、たいして儲からねえ物は放っておけ。ここは、なんでもありすぎるほどあるからな。なるべく金目のものだ。洗いざらい頂くぞ！」
おおう、と応えが返る。
と、同時だった。
天井の明かりが一斉に点り、凛とした声が響いた。
「そこまでです！」
明かりの下に立つのは、ボースの若き市長メイベル。
彼女の背後には自警団の一隊が控えている。それだけではない。噴水を取り巻くようにして、陰から鎧を着込んだ男たちが姿を現した。
「お、お頭、後ろにも！」
「待ち伏せてやがったか……」
眼光を光らせるヴォルグのまなざしを真っ向から受け止めて市長が宣言した。
「《風の狼》ですね？　抵抗を止めて、おとなしく捕まりなさい！」
「へっ……。聞けねえな。野郎ども、わかってるな！」
頭領の言葉を合図に、盗賊たちはいっせいに剣を構え、空いた手で導力器の結晶回路をなぞりあげた。
マーケットを舞台にした戦いが始まった。

13.

戦いの始まるほんの少し前まで。
実のところ、ナイアルが思ったほどにはドロシーは立ち直ってはいなかった。
戻ってきた愛用のオーバルカメラ・ポチ君を手にしても、心の中に立ち込めた霧は決して綺麗に晴れたわけではない。むしろ今まで通り写真が撮れるかな、とちょっと怖くなっていた。
ただ、そんなことを言っていても好転するわけではないとも思う。
ならば――今できることをやるだけだ。つまり、カメラを構えて準備すること。
――わたしにできるのはこれだけですしねー。
それに、とドロシーは思う。カメラマンとして、この機会は美味しすぎる。
とりわけメイベル市長の姿は絵になる。マーケットに明かりが点ると同時に、《風の狼》たちの前に堂々と姿を見せた。外見はたおやかな少女なのに、盗賊たちを前にして一歩も引きはしなかった。
なんて恰好いいんだろう。彼女の姿を見て、素直にドロシーはそう感じる。いや、自分でなくとも誰でも同じように感じるはずだ。
指が、勝手に動いていた。
カメラをいつの間にか目の前に掲げ、無意識のうちにシャッターを切っていた。
凛とした空気を纏って立つ女市長の勇ましい姿が、オーバルカメラの記憶子である感光クオーツへと次々と記録されていく。
「抵抗を止めて、おとなしく捕まりなさい！」
市長のその宣告を、盗賊たちは無視した。そうして盗賊たちと自警団は、互いに武器を抜きあい、導力魔法を使うべく空いている指を動かし――。
――っと、そうか。市長ばかり撮ってちゃだめだ！
この大捕り物の全体も記録しないと。
ドロシーは慌てなかった。手先だけでカメラを動かしても、被写体をうまく追うことはできない。自分とカメラがひとつの生き物になっているかのように、シャッターチャンスを求めてドロシーとカメラはフロアを動いた。
メイベル市長が相対している相手――。
レンズを振り向けた先の六人の男たちは、魔法を使う盗賊団である。それを市長は知っている。
ボースマーケットを狙った彼らの正体が《風の狼》であることを事前に突き止めていたからだ。それにはドロシーの撮った写真も一役買ったわけだけど。
それはともかく――。
メイベル市長は待ち伏せ要員の中に導力器を扱える者を待機させていた。
そして、盗賊団が抵抗すると見てとると、即座に「アンチセプトオールを！」と命令を下した。
アンチセプトオールは封魔――魔法を封じる効果を持つアーツだ。真っ先に相手の魔法を封じようとしたわけだ。迷

いなく素早く。

命じられた男が、胸元にペンダントのように提げていた導力器に指先を触れる。

スロット、と呼ばれる穴に埋め込まれたクオーツを、固有の連結構造に従って指で紋様を描くかのようになぞってゆく。

意志を込めて導力器を駆動させれば、彼の指先には出口を求めて神秘の力——導力が集まってくる。

ドロシーもオーバルカメラを駆動させるときに同じ経験をしているからわかる。

ああすると、じん、と指先が火傷をしたかのようにかすかなしびれを感じるのだ。

導力を導き終わった男が魔法を飛ばすために叫ぶ。

「やっ!」

声とともに六人の男たちに向かってぴりぴりする指を突き出した!

次の瞬間。

盗賊団の男たちの頭上にひっくり返った巨大な赤い渦巻が忽然と出現した。

マーケットの天井から吊り下がったシャンデリアや展示用のオブジェと重なるようにその竜巻はぐるぐると渦を巻き、ゆらゆらと揺らしてみせる。

けれど——ドロシーは知っている。

あの赤い渦は実際には吊り下がった物のひとつたりとも揺らしてはいない。

あれは実体のない導力の渦だ。空気と反応して光り出して可視化されているだけ。

逆立ちした赤い竜巻が渦を太らせながら頭上から落ちてきて、六人の男たちを傘で覆うように呑み込んでゆく。

うああ、と盗賊たちの声があがり——。

ふっ、と。

ほどけるように渦が消えた。ふらり。荒くれ者の何人かがよろける。お頭と周りから呼ばれていたひときわ大柄な男が、

「くそっ、これでも——」

喰らえ、と叫ぼうとした。だが、腰の導力器をなぞりあげて突き出した指先からは、如何なる力も出てきはしなかった。

封魔——魔法を使えない状態にされているからだ。

時を司るクオーツが導くアンチセプトの魔法は、導力を駆動させるために必要な身体の中の属性バランスを壊し、そのバランスが自然に戻るまでアーツを使えなくする。

魔法盗賊団から魔法が奪われた、わけだ。

ドロシーのカメラフレームの中で、盗賊団の頭領の顔が悔しそうに歪む。唇を噛み、目をぎらつかせ、それでも彼は諦めない。右手に持った短剣を前に出し、一、二、三度振って、近

づこうとする自警団の男たちを威嚇した。

《風の狼》の六人は、互いに死角を作らないようにしながら、塊となって自警団の輪を突破しようと計った。

彼らは焦っていた。

ファインダー越しにも見て取れた。

そうして、やたらと短剣を振り回しながら……六人のうちのひとりがこちらに向かって走ってくる。

大粒の汗を額に浮かせた男の顔がフレームいっぱいまで広が——え? あ!

——やばっ。

——こっちに来ますよぅ!

当然だった。ドロシーの目の前には警備員がいない。だからこそ遮る物なくカメラで彼らを狙うことができたのだ。いつの間にか無意識にこの位置まで動いていた。盗賊たちからしてみれば、手薄なところに見えるわけで。そこを狙って突破を計るのは当たり前で……。

先頭を切って囲みを抜けようとした男が、カメラから手を離したドロシーと視線を合わせた。大きく目を見開く。

「あっ! てめぇはマーケットで市長の後をだらだら追っかけてたカメラ野郎!」

「や、野郎じゃないですよっ。女です、女! いちおう!」

思わず反論してしまい。しかも一応ってなんですかー、と自分で自分に突っ込みたくなり——そんなことをしてる場合じゃないと気づく。

……でも、そこまで目立ってたのかやっぱり。まさか盗賊団の人たちまで、自分たちに気づいてるとは思わなかったですよ! 尾行になんて、なってなかったんですね!

——って、だから、こっちに来ないでくださぁぁぁい!

「おまえのせいかあああ!」

いえ、それは逆恨みですぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!

叫ぶ間もなくあっという間に距離を詰められる。短剣をドロシーに向かって突きだしながら、どんどん近づいてきた!

そのときになって、男の声がやや甲高くなっていることにようやく気付いた。

クロックアップの魔法だ!

アンチセプトはこれからかける魔法を封じるだけで、すでに効果を発揮している魔法は防げない。甲高い声はクロックアップの魔法のせい。しまった。

これは逃げられない。

殺される!

そう思ってから、そのあとの鼓動ひとつかふたつほどの間。魔法も使ってないのに、ドロシーには時間の流れがやけにゆっくり感じられた。口の中がからから。声も出せない。心臓の音がうるさいくらいに聞き取れた。手足が動かせない。

まるで凍りついてしまったみたい。
　だ・れ・か――。
「てめぇえ――ぐ！」
　男がどさりと崩れ落ちた。
　長い木の棒――物干し竿だ――雑貨店の店先にあったやつ、を振り下ろしたままの恰好で荒い息をつきながら、見知った男が立っている。
「だ、だいじょうぶかよ」
「せんぱい……」
　ナイアルだった。
「すごいですよー、ナイアル先輩！　まるでエステルさんみたいです！」
「ばかやろう。棒術使いに怒られ……っぞ。はぁぁぁ。ったくもう」
　助かった。
　安堵したのも束の間だった。ナイアル先輩の背後から、別の盗賊が襲い掛かろうとしている。先輩は気づいていない。
　ドロシーの指がオーバルカメラのコンソールをなぞりあげ、無意識のうちに夜間撮影用の閃光を焚いていた。悲鳴をあげ、襲い掛かってきた盗賊が目を押さえてのけぞる。
　そこに自警団員たちが次々とのしかかって取り押さえた。
「あっぶねぇ……。ありがとうよ」
「わぁ」
　思わず声が出た。
「なんだそりゃ」
「ナイアル先輩からお礼を言われたのって初めて――」
「なわけねぇだろ！　俺、そんなに恩知らずかよ！」
「――の気がちょっとだけしましたが、そういえば、前にもあった気がしますねー。たぶん、一年くらい前ですけど」
「あのなあ」
「冗談です、はい」
　その頃には頭領のヴォルグを含め、《風の狼》六人全てが捕えられていた。

14

「やれやれ……」
　肩で息をしながらナイアルはドロシーを見た。
　相棒のカメラ・ポチ君を抱えて満面の笑みだった。きっと満足できる写真が撮れたのだろう。これでようやく本当に天才カメラマン復活だろうか。だと良いのだが。
「ナイアルさん」
　声に振り返ると、メイベル市長だった。
「どうですか。良い記事は書けそうですか？」

　美人市長に微笑まれる。
「あ、ああ。おかげさまでな」
「それは良かったです。あの、それで、ひとつお願いがあるのですが……」
　市長の表情が微笑みから一転してごめんなさいの顔になる。
　警報が体内で鳴った。
　やっべぇぞ。あまりに簡単に同行取材の許可が下りたと思ったが……。確かにナイアルは粘り腰で交渉したけれど、それにしても敏腕市長にしては楽すぎたと思っていた。
「南街区の空賊騒ぎなのですが……」
「ああ、そっちはまだ解決してねえんだっけか」
「それが収まるまで、この事件を記事にするのは待って欲しいのです……」
「なっ……」
　――なんだよそれ！
　ナイアルは焦る。それは困る。こういう記事というのは速報性が命なのだ。街道を行き来する有名な盗賊団が逮捕された、なんてことはいつまでも隠せるものではない。
「な、なんでだよ⁉」
「記事から、こちらの警備体制を予想されては困るのです。もう少しの間でよいですから新聞に掲載するのは待ってください」
「そんなこと言ってたら、ニュースにならねえよ！」
　言い返しつつも旗色は悪い。市民のためと言われては断りにくい。
「せっかく熱心に撮っていただいたのに、申し訳ありません」
　メイベル市長がドロシーに向かってもきちんと頭を下げた。
「あ……そうですね。いえいえ。なるほど」
「おい」
　なるほどじゃねえよ。思わず突っ込む。ちったぁ写真が使えなくなって残念がりやがれっての！
「でも、市長さんも少しの間だけって言ってますし」
「俺の記者魂が憤ってるんだよ！」
「先輩が勝てないことはわかってましたし」
「おいこら」
　――市長に笑われてるじゃねえか。
　まったく、とナイアルは思う。ニマニマとさっきからしまりのねえ顔をしやがって。眼鏡の奥のほんにゃりとした瞳を見つめながらナイアルはため息をついた。
　――って、おい。何をしてやがる。
「はい。ピース！　笑って笑って――そうそう、いい顔ですよぅ。とっても美人さんですー」

『はい、チーズ』じゃねえのかよ！　てか、なんで俺と市長なんて撮ってるんだよ！　あと、男に美人もくそもあるか。いらねーっ」

「チーズ、だとお腹が空いちゃうんですよぅ」

「どんだけ食いしんぼなんだ、おまえは」

「いやー、ほら撮ってるときって、何も食べられないじゃないですか。だから、油断すると、ついお腹が減ってですねえ」

「聞いてねえよ……。てか、普通にしとけ、普通に！」

メイベル市長が、ではお願いしますねと言って去っていった。その後ろに影のようにメイドのリラが付いていく。疲労感がたっぷりと押し寄せてきた。

まあ――とりあえず事件のほうは解決したっぽい。

ナイアルの懐事情だけが未解決のままだった。

エピローグ

ふかふかの絨毯は足の裏で踏みつけるたびに、頼りない感触を返してくる。靴の半分ほどまで沈み込むものだから落ち着かないったら。

ドロシーはボース市最大のレストランの中を歩きつつ、ひたすら目に入るものを値踏みしていた。

あの額に入った絵は、いったいリラをいくら積めば手に入るんだろう。確か昨年の王都で開かれた展覧会で話題になった作品だと思うのだけど……。こうしてみると市長の屋敷は決して華美ではなかったのだなぁとわかる。

視線を巡らせると、フロアの片隅のテーブルに座る先輩の姿が目に入った。

近づいて、向かいの席に腰を下ろす。

「せ、先輩。ミラはだいじょうぶなんですか。ココ、高そうですよぅ」

にっと先輩記者が笑みを浮かべた。

「穴埋めに書いたやつで経費が出た」

と言った。

詳しく聞いてみると、《風の狼》に関する記事は載せられなかったものの、穴埋めにと出した『メイベル市長の華麗な一日』が採用され、取材費が出たという。

「おまえの写真は使えなかったが……悪かったな。苦労だけかけちまって」

「いえいえー」

「詫びといっちゃなんだが、好きなもん頼んでいいぞ――って、なんだよ、意外極まりないって顔をしやがって！」

「いえいえ、この顔は地顔ですし」

「嘘つけ」

「決してナイアル先輩にしては珍しいこともあるなんて、欠

片も考えてないですよ」

「そんなこと考えてやがったか」

「えへへへ……ちょっとだけですよぅ」

「食ったら、次の街に行くからなっ」

「はーい」

ドロシーは笑顔で応えた。

好きなものを頼んでいい――なんて魅惑的な言葉だろう。嬉しくてにやけてしまう。

「次は――」

「はい？」

ナイアル先輩が顔を背け、明後日のほうを見つめつつ口を開く。

「スクープ写真を載っけるぞ」

ぼそっと、そんなことを言った。

ドロシーだって気づいた。ドロシーがちょっとしたスランプから抜け出せたのかどうか、先輩は気にかけてくれているのだ。

ちらりと、椅子の背にかけた自分の鞄を見やる。その中には、感光クオーツから焼きつけたばかりの、マーケットの大捕り物の写真が入っている。

夢中になって撮った写真の数々は自分でも納得のできるものだった。

いつの間にか――いつも通りに撮れていた。

きっと、あれこれ考える余裕がなかったのも良かったのだ。

「だから……撮れねえとかゆーなよ！」

言い放ってから、もう顔を上げずに並べられた食事を食べ始めた。

「はい！」

元気よく、そう答えることができた。

鞄の中の写真たち。とりわけ最後に撮った一枚はお気に入り。会心の出来栄えだ。

ナイアル先輩と、ボース市長メイベルのツーショット。

滅多に見せない照れたような顔のナイアルと、柔らかく微笑むメイベル。

ふたりの内面まで写せているように思う。

でも、その一枚はこの先輩には見せられない。自分が名士と写りこんでいる写真など、ナイアル・バーンズという男はきっと有難いなんて思わない。

仕方ない。個人用で保管しておくしかない。もったいないけど。

運ばれてきた平目のムニエルを口に運びながらドロシーは少し残念に思った。

それでも、とドロシー・ハイアットは思う。

自分にとっては、会心の写真が撮れたというそのこと自体が、他の何よりも誇らしくあり嬉しいのだった。

END





那由多の軌跡

キャストコメント第二弾は、ついにあの眠れる少女が……!?

前号に引き続き、日本ファルコムの最新作『那由多の軌跡』のゲーム収録後のコメントをご紹介。今回は、公式ホームページ開設時から話題となった謎の美少女・クレハなど、3人のコメントが到着したぞ。



庭園の眠れる少女 クレハ（声／竹達彩奈）

★ COMMENT

■収録を終えた今の感想と演じられたキャラクターについてお聞かせ下さい。

『英雄伝説 碧の軌跡』で演じさせていただいたシャーリィが結構物騒な女の子だったので、ガラリと変わったおとなしめな可愛らしい子を演じることができてとても楽しかったです。クレハちゃんは最初眠っていたということで、ホワーンとしてはかなげなイメージを壊さないように気をつけました。ナユタたちと触れ合っていくうちに色んな感情が芽生えていくので、ぼんやりしてるところからちょっとずつ感情を乗せていって、エンディングでは明るい女の子にしていけたらいいなと思って演じさせていただきました。私自身、すごく新鮮な気持ちで演じさせて頂けたので、とてもうれしいです。

■最後にファンの皆さんにメッセージをお願いします。

今回『碧の軌跡』とはまた違った雰囲気の作品で、オリジナルならではの独特な世界観と設定で私も発売されたらプレイしてみたいなと思っています。皆さんもぜひヒロインの可愛さや登場するキャラクターたちの魅力をチェックしていっぱい楽しんでほしいです。



ロストヘブンで暗躍する謎多き男 ゼクスト（声／置鮎龍太郎）

★ COMMENT

■収録を終えた今の感想と演じられたキャラクターについてお聞かせ下さい。

今回とても威厳のある役で、作品の中でどのような立ち位置になるかはプレイしていただいてのお楽しみということで……。あんまり派手な感じではなく、威厳を持って、という印象で演技に臨みました。

■演じられたシーンの中で見どころを教えて下さい。

たぶん登場の時は「この人誰なんだろう」ってもったいつけた感じのところもあると思うんですけど、話が進むにつれて一瞬決着が……という場面でのアッと驚く展開などは面白いと思いますね。

■久しぶりの日本ファルコムさんの作品への出演となりますが、それについて一言お願い致します。

最近の作品とかでもＰＶを見たりしてすごく馴染みのあるゲーム会社さんだったので、関われてとても光栄に思います。これからもよろしくお願いします。

■最後にファンの皆さんにメッセージをお願いします。

大人気シリーズの最新作ということで、とても壮大な叙事詩となっております。是非ぜひお楽しみください。よろしくお願いします！



素直になれない幼馴染 ライラ（声／広橋涼）

★ COMMENT

■収録を終えた今の感想と演じられたキャラクターについてお聞かせ下さい。

『那由多の軌跡』自体は壮大なお話のようでその断片を感じるんですが、ライラはどちらかというともうちょっと日常のシーンに登場します。ナユタの幼馴染で素直になれない女の子の、キュンとするような感じが出ていて演じていてとても楽しかったです。甘酸っぱいですね。

■演じられたシーンの中で見どころを教えて下さい。

最初にライラが出てくるシーンでナユタに久しぶりに会うからと一生懸命挨拶を練習してるところが、ライラというキャラクターがよく出ているなと思いますのでそこが好きですね。あと結構ライラは泣きます（笑）。号泣するシーンも出てきますので、ライラ的にはそこを聞いてほしいです。

■最後にファンの皆さんにメッセージをお願いします。

情報も少ない中で「軌跡」シリーズが好きな方は心待ちにされていたであろう『那由多』、たぶん２ヶ月後には出ているのではないでしょうか。今回ＰＳＰで出るということで、私もプレイできると個人的にも非常に楽しみにしています。なので皆さまも私と一緒にワクワクドキドキしながら発売を待っていてください。よろしくお願いします！

■製品情報

■タイトル　：那由多の軌跡（ナユタノキセキ）
■発売日　　：2012年7月26日(木)
■ジャンル　：ストーリー ARPG
■対応機種　：プレイステーション・ポータブル専用
■プレイ人数：1人
■税込価格　：通常版…6,090円（税抜5,800円）
　限定ドラマＣＤ同梱版…7,980円（税抜7,600円）
■CEROレーティング：B［12才以上対象］

©2012 Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と
人生について熱く語ります！



『ファルコムJ.D.K.BAND2 ／ダルク=ファクトの逆襲』



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤裕央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc



こんにちは、jdkBANDドラマーのオカジです。

皆様、先日5／12に開催されたニコファーレで開催された『jdkBAND SUPER LIVE in ニコファーレ～今日は零の軌跡Evolution・那由多の軌跡・Ys25周年祭りだぁ～』はいかがだったでしょうか？

実際、メンバーやスタッフも一丸となった、かな～り熱いライブでした。個人的にはYsから『FEENA』や『FIRST STEP TOWARDS WARS』、ソーサリアンから『遥かなる時を越えて』など、最近のライブではあまりプレイされていない過去の名曲が演奏できてとてもうれしかったなあ。

今後も色んな名曲をセットリストに盛り込んで、新旧ファン両方共に喜んでもらえる楽しいライブを作って行きたいなと思う所存でございます。とにかく、より多くの皆様にjdkBANDを見て頂きたいっ!!

さてさてそんなわけで今回は我々の大先輩、大文字『J.D.K.BAND』の超名盤をご紹介したいと思います。

『ファルコムJ.D.K.BAND2／ダルク=ファクトの逆襲』

こちらは1990年にデビューを果たしたJ.D.K.BANDの2枚目のアルバム。選曲もアレンジも冴え渡っており、とにかくカッコイイ！ 最高の一言に尽きます。僕自身のドラミングにも多大な影響を与えている一枚です。とは言ってもこのアルバム、ドラムは全部打ち込みなんですけどね。でもこれが信じられないくらい良くできているんですわ。J.D.K.BANDのベーシストであり、アレンジャーの岸本さんの手による打ち込みのドラムは、ドラマーの僕が今聴いても物凄く自然で、このままコピーして演奏できちゃう完成度です。ちなみに言っておくと、こちらのアルバムに収録されている楽曲ではありませんが、最近のjdkBANDライブで演奏している『TO MAKE THE END OF BATTLE』は当時のOVA版『Ys 2』のオープニングに使われたアレンジバージョンで（厳密に言うとPVバージョンなんだけど）、こちらも岸本さんの手によるものなのです。だから、僕は岸本さんの打ち込んだドラムを基本に、自分なりのドラムアレンジを加えて演奏していたりするわけですよ！ これ豆知識な！

そして更に言えば、その昔、僕がロックドラミングを学んだのも実はこのアルバムだったりするんです。僕は14歳の頃からドラムを叩いているのですが、ドラムを始めた当初はロックにはまったく興味がなく、どちらかと言うとジャズやフュージョンを好むいわゆる『マセガキ』でした。ところがある日、ひょんなキッカケでロックに目覚めてしまい、ロックドラムってやつを突然練習してみたくなってしまったのでした。でもロックのアルバムなんて手元には一枚も無い！ ……さてどうしたものかとCD棚を見ると、このアルバムが燦然と輝いているではないですか！ そうだ、J.D.K.BANDのアルバムがあるじゃないかっ！

これはどう考えてもロックのアルバムだし、これで練習すればいいんだ！ という事になり、このアルバムのほとんどの曲をコピーしたのを覚えています。自分でもビックリな話ですけど、僕のロックとの出会いのアルバム……それは何を隠そうこのアルバム『ファルコムJ.D.K.BAND2』だったのでした。

……このアルバムから一曲位、次のライブでやれないかな。多分今でもほとんど完コピ状態で叩けるし（笑）。……あ、次回ライブは7／27東京日本橋三井ホールですよ!! お楽しみにっ！







ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで
世界50ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが
適用されたiTunes Plusでの配信となります)

iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
[ファルコムJ.D.K.BAND2
ダルク=ファクトの逆襲]
価格：1,500円
収録曲数：10曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

 ©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『軌跡』シリーズと人気MMORPGの夢のコラボが実現！

ファンタジーアース　ゼロ



日本ファルコムの『軌跡』シリーズと、ゲームポットの人気MMORPG『ファンタジーアース　ゼロ』の夢のコラボが実現！　現在開催されているコラボイベントでは、プレイヤーが『軌跡』シリーズの人気キャラクター・エステルやロイドになってゲームを遊ぶことができるアイテムが販売されているぞ。もちろん、ボイスはすべて新規録り下ろし！

あの伝説の一枚が、iTunes Storeで配信開始！

ほしのありかざんまい



昨年のコミックマーケット（C81）で発売された企画CD『ほしのありかざんまい』がiTunes Storeでも好評配信中だ。『空の軌跡』の劇中曲『星の在り処』を、小寺可南子、水谷美月、イカルス渡辺、アネモネ(blue chee's)といったさまざまなアーティストがカバー。時を経ても色あせない名曲を今一度その手に。１曲150円。（カラオケ含む）全10曲1200円。

話題の新作から早くもキャラグッズが登場！

『那由多の軌跡』アクセサリーセット



７月26日に発売される『軌跡』シリーズ最新作『那由多の軌跡』のアクセサリーセットが、ソフトと同時発売されることが決定した。その気になる内容は、【ミニタペストリー】、【クリーナークロス】、【フルカラーストラップ】の３点セットになっているぞ。２０７９円（税込）

スマホでエステルたちを『嫁』にしちゃおう！

嫁コレ





スマートフォンで好きなアニメ・ゲームのキャラクターが、録り下ろしボイスでグッと来るセリフをしゃべってくれるアプリ『嫁コレ』で、現在『空の軌跡』のエステル、ティータ、クローゼが好評配信中。これさえあれば、いつでも好きなキャラクターと甘いひと時を過ごすことができるぞ！

©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©2005-2011 SQUARE ENIX CO., Ltd. All Rights Reserved. Licensed to Gamepot Inc.

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



にょろ

個性溢れるキャラが数多く登場するファルコム作品。オルキスタワー攻略作戦時に、あのフラフラレクターが剣やアーツを使うのを見た時の衝撃は今でも忘れられません。碧の軌跡の続編が待ち遠しい日々です！

『英雄伝説 零の軌跡』（2010）

「壁を乗り越える」をテーマとした「軌跡」シリーズ第４作目。人と金が集まる都市でのストーリーと、エナミカツミが担当したクールなキャラクターデザインで一味違う「軌跡」を楽しめる。

©Nihon Falcom Corporation. All Rights Reserved.

FB ファルコムブックス 好評発売中!!







特務支援課メンバーの『零』までの軌跡を描く

英雄伝説 零の軌跡　四つの運命

著：田沢大典　イラスト：松竜

2010 年、2011 年に発売された日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』『英雄伝説 碧の軌跡』の主人公である【特務支援課】メンバー・ロイド、エリィ、ティオ、ランディの、ゲームでは語られることのなかった過去エピソードや、名シーンの裏側などが描かれた日本ファルコム公認のオフィシャル小説です。

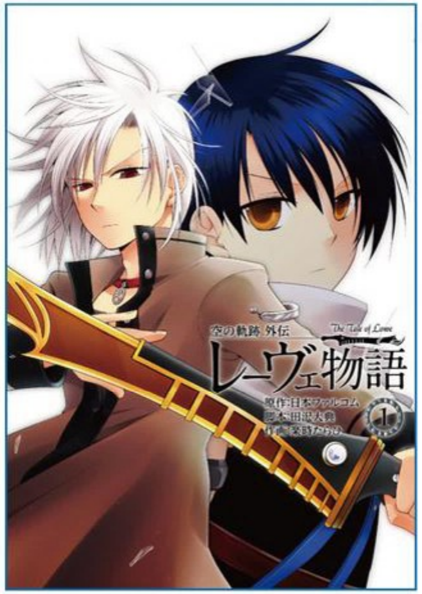
判型：B6 正寸　**総ページ数：**320P
価格：1,155 円(税込)
発行：フィールドワイ　**発売：**メディアパル
ISBN：978-489610-215-4

剣帝・レーヴェの視点から『空』を描いたコミックス

空の軌跡外伝 レーヴェ物語

脚本：田沢大典　作画：楽時たらひ

累計販売本数100 万本を越える日本ファルコムの『軌跡』シリーズ。その人気キャラクターである《剣帝》レオンハルトが、いかにして結社に組みすることとなり、そしてその後の数奇な運命に巻き込まれていくかを描く、『空の軌跡』のアウターストーリー。



判型：A5 正寸　**総ページ数：**160P
価格：893 円(税込)
発行：フィールドワイ　**発売：**メディアパル
ISBN：978-489610-224-6

©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



❶特務支援課メンバー
４人のサイン入り
『英雄伝説 零の軌跡 四つの運命』
ロイド・ランディ・エリィ・ティオの特務支援課４人のキャストのサインが入った超豪華単行本！

❷『Falcom magazine』特別出張版２冊セット　**3名様**



ファン必見の情報が盛りだくさんの小冊子をセットで！「店頭で入手できなかった」という方、チャンスです！

❸東京ゲームショウ限定
光る！『碧の軌跡』
トートバッグ
日本ファルコムのブースでのみ配布されたオリジナルバッグ。光るLEDライト入りで注目度200% !?



プレゼントの応募方法　こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- 下記のメールアドレスをご記入ください。
- お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- 右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- 希望するプレゼントの番号をご記入ください。
- 「vol.16プレゼント係」とご記入ください。

宛先：
件名：vol.06プレゼント係

○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

【記事一覧】

1：『セクシー＆ワイルド』
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット
4：英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～
5：jdkバンドドラマー・オカジの人生半キャラずらし
6：ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
7：啄木鳥しんきのファルコム大好き！
8：FalcomFanArt Collection
9：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り **6月22日**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.16

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

Copyright
©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved.
©2012 FIELD-Y
©YUKIYA MURASAKI , KUBOCHA 2012
©SHINKI KITSUTSUKI 2012
©AIKYOU 2012
©DAISUK ARAKUBO 2012
©MIYABI HASEGAWA 2012

Falcom
日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。